

い事ことでしたから、私は嬉うれしくてく〜堪たりませんでした。

「序ついでですから、お宅たくまで送おくつてあげませう」

「さう、有難ありがたう、御迷惑ごめいわくぢやなくつて……」

「少しも……歩あきながら行いかうぢやないですか」

「さうね、濟すみませんわ、ね」

ベリック夫妻の家は、ホーランド公園附近に在りますので、パーサーを其の家まで送り届けるには、餘程、迂曲道をしなければなりません。私が、私は其の夜に限つて、パーサーの家が、成るべく遠くに在つて欲しいと、心に念ねんじました。

四、パーサーの家庭

二人は街の夜道を歩きながら、いろいろの談話に打ち興きまりました。未だ戀知らぬ初々しい少女ですが、パーサーは文藝に深い趣味を有つて居ると見え、談話は主として英國文學の上へのみ賑にぎひました。

パーサーの意見に依りますと、シエークスピアやテニソンの作物は、多くは空想ばかりでして、彼等は一種の偶像論者に過ぎないさうです。何んな傑作でも、それが其の時代の民衆の實生活に觸れないものや、又は時代の思潮や生活を背景にしないものは、讀んでも面白く無いと云ふのです。そして、

「妾めかけの好きなのは、さうね、ツルゲーネフに、それからアンドレーエフに、モーパッサンも好き、ゾラも好きよ、生意氣なまいね」

と云つて、極きまり悪氣わるげに微笑ほほみしました。別に深い文學上の素養そやうが有つて

の事ではなく、唯一讀者としての好悪から、立論するに過ぎませぬけれど、パーサーの文藝觀には侮り難い見識が有りました。私はこんな可愛い娘を生んだ家庭の幸福を想像しながら、ベリック氏夫妻の家より小一里もある彼の女の家まで、愉快に面白く語りながら辿りました。勿論、二人とも腕を組み交して居ましたもの、他所目には嬉しい戀仲の若い者同士と見られたこととせう。

パーサーの家に、パーサーを送り届けますと、パーサーは無理に私を應接室へ導き入れて、其の父母に紹介してくれました。住宅は中流の生活をして居るらしい瀟洒な構へでして、両親は極めて温順な、一見して懐し味を覺える様な人柄でした。そして、パーサーを送つて行つたことを非常に喜びまして、

「珍しい日本の若紳士、これを御縁にこれから後は、是非遊びに入らつしやい。何は無くとも私等夫婦の誠心を御馳走と思し召して！」と熱い握手をいたしました。其の夜は其の儘別れて立歸りましたが、私の心はパーサーの一顰一笑に囚はれてしまつて、それから後と云ふものは、寢てもパーサー、起きてもパーサー、夢にも現にも、パーサーを忘れることが出来なくなつてしまひました。

與謝野鐵幹の詩に「妻を娶らば才長けて、顔美はしく情ある——友を選まば書を読んで、六分の狂氣、四分の熱——」と云ふ意味のものが有りました。私は此の詩を想ひ起して、自分も妻を娶るならば、たとへ異人種でも構はないから、パーサーの様な少女と、互に理解し合つた戀をして、其の戀の上に立脚した夫婦になりたいと思ひました。

戀愛に國境は有りませんもの、黄色な私が白いパーサーに戀したつて、何も不思議な事では無いと思ひます。

パーサーの家には、それ以來度々、アフターヌーンティーに招ばれまして、兩親にも可愛がられました。パーサーとは益々戀意な間柄になつて行きました。私が訪ねて行きますと、パーサーは何時も嬉し気にソワソワして、先づピアノに對ふのが例でありました。そして種々の曲を弾いたり唄つたりして、終には二人とも涙をホロホロこぼして、譯もなく感傷的の氣分になることも、度重なる様になりました。私は電車の中で見初めました當時から、切ない戀心地になつて居ましたが、パーサーは其の頃になつて漸く、二人の仲が戀であることを自覺したらしい様子でありました。

ピアノの次はお極りの文學談でして、それから婦人論やら家庭の話やら、二人は他愛の無いことばかり話し合つて、時間の經つのを忘れるのが例になつてしまひました。折々は母親が二人の許へ入つて来て、仰山らしく笑ひながら、頓狂な調子で、

「餘りお仲が好さ相だから、御褒美ですすよ」

と云つて、午後の茶菓を饗應ふこともありました。私はパーサーのお客様と云ふよりは、パーサーの家人の様な氣持になつてしまひました。が、パーサーの兩親も亦、私を待遇するのに、次第に他人行儀の隔てが無くなつてしまひました。

斯う云ふ風にして、パーサーと私との戀は、一點の邪念も交へない高潔な感情のみで、日を追うて深くなり行くばかりでした。

五、深夜の漫ろ歩き

パーサーと私とは、二人連立つて公に散歩することを、其の両親からも許される迄の仲になりました。世界は二人の爲めにのみ幸福である様な氣持がして、私はパーサーに逢ふことを、毎日の日課とし仕事として、快樂多い倫敦の月日を過しました。

恐ろしく霧の深い或る夕、世界で有名な實業家ストロース氏が、自分で作曲した數曲を初めて公演する大音樂會が、クキンス・ホールで開かれました。パーサーと私とは両親の許しを得て、二人連立つて地下鐵道に乗り、一代の天才が神來の妙音樂に、一夜を樂しむことを想像しながら、會場へ参りました。地下鐵道での談話は、「英國の女」に就

いて、お互の觀察を語り合いましたが、多くの場合に於て、パーサーは私の意見に裏書する忠實な賛成者でありました。

「一體、この倫敦で見る多くの婦人は、理想にのみ生きやうとして、現實と云ふことを疎略にする傾向が見えますね」

と私が云ひますと、パーサーは莞爾に笑つて、

「それが英國の若い女氣質かも知れないわ」
などと、温順に私の説に同意を表しました。

クキンス・ホールでは、一代の名音樂に心耳を洗うて、何だか斯う人間界を超越した様な氣持になつて、二人とも歸路に就きました。パーサーは右の腕に私の左手を巻いて、私は心も身もパーサーに任せて、夢見る様な心地で、オックスホード街を歩きました。二人とも感激の

高潮に達して、深い沈黙に落ちて居ながらも、其の心と心とは、何處かて相通じて居る様な氣持がしました。

二人は無言のまゝ、トロデカロの料理店に入つて、無言のまゝ遅い晚餐を食べました。ストロース氏が名曲の餘韻は、深く二人の胸に沁み込んで、何か斯う切ない遣る瀬ない心になつて居たのでせう。パーサーは折々白い齒を現して、チャーミングな眼許で微笑みながら私の顔を凝視めました。私も無言で微笑みながら、思餘るやうなパーサーの眼許に報いました。それと明ら様に打明けずとも、二人は互の心を自覺して、それが切ない戀であることを、何人の前にも否むことが出来ない身の上になつて居たのでした。

自動車にも乗らず、また腕を組み交し歩きながら、パーサーの家路

を辿りました。レゼント街からハイド公園の前を通つて、ホーランド公園の通りに出ましたのは、午前三時を過ぎた頃でした。四邊には更に人の氣配がなく、天地たゞ陰森として、折々聞ゆるものは倫敦名物のハンソンの馬蹄の音や、馭者の鞭打つ響のみでした、濃霧の中に街燈がボンヤリ照して居る眺望は、誰かの詩中にある景色だと思ひながら、二人はヒタと寄添つたまゝ、黙つて此の畫中の人になつて居ました。その内に女は、感極まつたと云ふ調子になつて、

「ねえ、貴郎、繪の様な景色ですわ、ね」

と云ひました。私も此の時初めて、

「え、あなた、何うかして？」

と訊ねますと、パーサーは笑顔になつて、

「い、え、若い男と若い女とが、こんな深夜に、こんな景色の中に、深い、物思ひを包んで歩いて居ますのは、繪ですわねえ、詩ですわねえ。貴方は何う思つて？」

と燃える様な眼で私を凝視めました。私は最う夢に夢見る心地になつて、女の手を堅く握り締め、

「ミス、パーサー、私を愛してくれて？」

と、聲おのゝかせて云ひますと、女は僅に、

「え、……」

と答へたのみ。二人は初めて其の日その夜、熱い熱い接吻をして、互の切ない戀を打明けました。

ほのゝと夜の明ける頃、パーサーの家に送り届けますと、女親が

玄關へ出て来て、

「まあ遅い音楽會ですわね、二人は何處を何う迷い子になつて居たのです。それでもまあ、御無事で宜かつたけれども……」

など、云つて、二人の顔を見て笑ひ興じました。あゝ思ひ出深い其の日その夜、私はもう心の重荷を半ば免れた様な氣持になつて、二人の戀の前途の多幸をのみ神に祈りました。

六、三年目の夏の夕

パーサーと私の戀は、其の後益々熱度が加はつて、ホーランド公園の三年間を、夢か現の間に過ぎしてしまひました。

けれども二人の戀は、何處までも空想的にして、また小説的にして、

肉感とか包擁とか云ふ方面には、一步も墮落することなくして過ぎました。彼の女の兩親も、二人の清い美しい戀の前には、其の監督權を濫用することが出来ず、反つて二人を兄と妹の様に遇つて居ました。私を呼ぶにも「佐崎」と云ふ本姓は呼ばずに、富雄の富を取つて、常にトミー、トミーと親し氣に呼び捨て居ました。

人種を異にする異邦人でも、親子となり夫婦となれば、そこに人種的見解を超越した愛情が湧いて、反つて同種族以上に親密の度を加へるものかと思ひます。パーサー家に於ける私の位地が恰もそれで、トミー、トミーと呼ばれるにつけて、私も亦パーサーの兩親を、父と懐しみ母と親しむで、三年の月日を夢見る様な心地で過ごしました。兩親の心は、二人を夫婦にすると云ふ確たる考へは無かつたにしても、

パーサーや私の思は、「末は夫婦」と云ふ一語に向つてのみ、躍動して居たのでした。二人が夫婦になると云へば、兩親も無論、許して下さるであらう、と云ふことを唯一の快樂にして、三年間の雨や風や、春にも秋にも、二人の月日は幸福でありました。

けれども私達二人の戀は、「夫婦」と云ふ形體を實現すべく、餘りに其の前途が遠遠でありました。倫敦のホーランド公園に住んで、日夜を戀愛三昧に暮らして居たと云へば、如何にも呑氣らしく聞えますが、私の身には常に生活の不安が付き纏うて居ました。そしてパーサーと知つてから三年目の夏には、是非とも日本へ歸らねばならぬ事になつて、パーサーとも別れねばならぬ悲しい夕が來ました。思へば漂泊の旅人に似た私の様な男に、綿々思慕の情を寄せて居たパーサーの純潔

な心に對して、私は今更、何うして「別れる」など、云ふことが出来ませうぞ。これが若し若干の金に依つて、貞操を賣物にして居る類の女とか、又は道ならぬ不義をして居る仲であつたならば、別れるにも別れ易いかも知れませんが、パーサーと私の戀は、そんな路傍の浮氣沙汰では無いのでした。永遠に一つにあるべき筈であつた二人の心は、「時」と云ふ暴威を以てするも、容易に個々別々になり得る様な、そんな日常茶飯の戀では無いのでありました。

私がパーサーを其の家に訪ねて、何の氣もなく、

「今度、日本へ歸ることになりました」

と告げたのは、涼しい夏の夕でありました。パーサーは、

「え、歸る、日本へ、何時、ほんと？」

と僅に云ひ得たのみで、暫時は半信半疑と云ふ風でありましたが、やがて二人は連立つて、夕暮の樹立の間を散歩しました。最後の「別れ話」をするには、相應しからぬ夏の夕、二人の心は淋しい秋の野徑を辿るやうで、涙が止め度もなく流れるばかりでした。

「何うして歸るの、妾を倫敦へ置いて、何うして日本へ歸るの、餘りだと思つてよ」

薄い白ツばい服着たパーサーの姿は、黄昏の樹立の間に浮んで見えましたが、咽び泣く可憐の様子のみは、深い森の中に沈む様に思はれました。パーサーは歎歎しながら、

「貴君と妾とが切ない戀を語つたり、楽しい戀を語つたりしましたのは、今二人が歩いて居る所ではありませんか。あれほど許しもし許さ

れもして居る仲でしたのに、貴郎は何うして日本へ歸るなど、思ひ立つたのでせう。今となつては一人では歸されないから、妾も一所に連れて行つて下さい。たとへ一軒の家は無くとも、貴郎と妾と唯二人で、楽しく暮らせさへすれば宜いではありませんか。貴郎のためにならば、父母も兄弟も捨てますから、改めて結婚して、私の好きな日本へ連れて歸つて下さい、ね、ね」と搔き口説きました。私はもう何うして宜いやら判らなくなつてしまひ、暫時は無言のまま、歩いて居ましたが、やがてバーサーの家の裏庭に入つて、二人並んでベンチに腰掛けました。

七、悲しき別離の夕

二人はベンチに腰掛けたまゝ、四邊が暗くなるのも氣付かずに、取止めもない三年間の思ひ出に耽りました。ブライトンの海岸に避暑して、ライン河に短艇を浮かべたことや、コロンやハイデルベルヒや、ミュンヘンの楽しかつた旅行や、さては去年の暮、スコットランドの片田舎に旅して、ルーホード停車場から程遠からぬ田舎家に宿つたことや。その家はサンドバチ氏と云つて、倫敦から三百哩も離れて居る所だけに、都の二人を珍客として待遇してくれたことや、バーサーが倫敦の話をするれば、私は日本の話をして、老夫婦を喜ばせたことなどが、廻り燈籠の様に、二人の思ひ出に浮びました。そして、バーサーは夢見る様な表情をして、

「サンドバチのお母さんは、日本まで汽船で一二月かゝると云つて

も、そんな遠い國はないと云つて、眞實にしなかつたわ、ねえ」と云つて、私の手を握りしめました。

「窓の外には雪が降つて居て、如何にもサンタクロースが來さうな、クリスマス前後のやうでしたねえ」

私も斯う云つて、暫時は片田舎で過した冬籠りの楽しい夢を、現心地で追うて居ました。

夏の夜は明け易くて、二人が相抱いて泣いた樹蔭にも、いよゝ別れの悲しい朝が見舞ひました。眼を泣き腫らしたパーサーと、別離の念に心亂れた私とは、パーサーの書齋に入つて、長椅子に腰掛けたまゝ、また深い沈黙に落ちました。かうして別れねばならぬのが、二人の短い淡い戀のページであつたかと思ふと、私は堪らなく悲しく

なつて、果は女の前をも憚らず、歎歎いたりしました。

パーサーの両親に、日本へ歸る旨を告げましたのは、其の日の午後の茶時でありました。父親も母親も、餘り突然の事でしたから、最初の間は戲談であらうと遇つて居ましたが、いよゝ眞實であると判つた時には、さすがに驚きの眼を睨つて、私の顔を凝視めました。

「愛するトミーが、生れた國へ歸るとは、ほんとに夢の様な、俄に降つて湧いたアツ氣な事です。若し此のパーサーを可愛いと思ふなら、何うかゴールドマン家の總體を、何時までも何時までも忘れずに居て下さい。齡老つた此の父母は、トミーが一日も早く日本から歸つて來て、今までよりも一層熱心に眞實に、娘を可愛がつて遣つてくれることを信じてゐますよ」

パーサーの両親から誠心をもて掻き口説かれたばかりでなく、三人の召使者までが、交る／＼私の前に出て、

「何うしてお歸り遊ばすのです、生れたお國がそんなに懐かしくて、この倫敦がお厭になつたので御座いますか」と、心から別離を惜んでくれました。

厭な思ひ出の日本へ歸るよりは、楽しい倫敦に居る方が、何んなに幸福か知れませんが、その頃からまた生活費の供給を失つて居た私は、何うしても倫敦へ留まることが出来ないのでした。それと明らかにパーサーに打明けたなら、ゴールドマン家の珍客として、両親の同情の下に生きることが出来たでせうが、私は何んなに切ない思をして、其の事だけは男子の面目として、パーサーや其の一家の人々の前に、

話す勇氣がありませんでした。

其の日の晩餐會は、私を送る別れの宴とても云ひませうか、極めて淋しい悲しい間にも、いろ／＼の思ひ出話がはづみしました。それでも両親は笑顔をして、何かと談話の緒端を引出したり、憂ひに沈んだパーサーを慰めるために、強て賑かに笑つたりしましたが、パーサーと私は無言勝で、折々互の顔を見合せては、人知れず涙を拭ふばかりでした。眼色や毛色を異にして居ましても、心と心と相許した戀仲は、黄色と白色との差別を超越して、人類の真情が流れて居たのでせう。

パーサーはピアノを弾じたり、戀の歌を唄つたりして、悲しい苦しい悶えを遣りました。私は其の手を握り、其の肩を抱いて、

「別れの時は悲しくても、また逢ふ日の歡びがありますよ」

と力強く叫びました。二人の間には、果して又逢ふべき歡樂の日が廻つて来るでせうか。

八、女主人公の油繪

いよいよ倫敦を去らねばならぬ日が、私の前に悲しい苦しい淋しい幕を開きました。それは九月も末の曇つた日で、戀ひ慕つた同士が別離の悲しみに、空も心ありてか雨降らす雲の往來が、何となく急いで見える様な、心の落着かない陰氣な秋の初でありました。

三年の間住み馴れたホーランド公園の家は、朝早く引上げて、バーサーの家から出發することになりました。両親に最後の握手を交して、バーサーと共に自動車に乗り、フエンチャーチストリート停車場

へ行くまで、女は自動車の中で泣いてばかり居ました。

「これが、永別の旅行ですわ、ね」

停車場には日本の友達も三五人、私を見送りのために来て居ました。そして、バーサーの姿と私の顔とを見くらべて、不審さうに私語さ合ふ者もありました。私は泣くにも涙が出ないほど、切ない苦しい念を包みながら、ロイヤルアルバート・ドックから熱田丸に乗つて、いよいよ英國の土を離れてしまひました。

バーサーは船中まで送つて来て、熱い接吻をしては、泣くばかりでした。そして、

「一生涯、忘れないやうに、忘れないやうに……」

と云ふ言葉を繰返しては、流れる涙を拭うて居ました。

熱田丸は午後正三時に、ドックを離れて、黒煙を空に漲らしながら、テムス河に浮かびました。舷側に凭れて、涙に曇る眼もてパーサーの姿を顧みたら私の心と——、何時までもくドックに立つて、紅色のハンカチーフを振つて居たパーサーの心と——。二人の姿は、次第に遠く隔つてしまひましたが、二人が三年間の甘い思ひ出は、永久に二人の感情を繋いで居る様に思はれました。

私は獨り船室に入つて、心ゆくまで泣きました。三年間の倫敦生活に、私の得た唯一つのものは、「切ない戀の涙」でありました。

この書齋に架かつて居る女の油繪が、今お話ししたパーサーです。私は日本に歸ると直ぐ、また新しい戀の甘酒を汲むのに忙しくて、

パーサーの事は忘れるとしもなく過ぎて居ましたが、パーサーからは一ヶ月に一通づつ、の速度で、其の後二三年の間と云ふものは、長い手紙を送つてくれました。

今は斯うして妻を娶り、二人の子の父となつて、家庭と云ふものゝ中に納つて居ますが、さすがに倫敦の三年間、殊にパーサーとのブラトニック・クラブは、今日に至るまで忘れ去ることが出来ません。私はパーサーの寫眞を友人の畫家に示して、この油繪に描いて貰ひ、僅に寫眞で見參するのを、此の日頃の思ひ出にして居ますが、今頃は何う暮して居ますやら。もう宜い加減の齡ですもの、薄情な私の事などは忘れてしまつて、嫁して妻となり母となつて、私が斯うして思ひ出を語る様に、パーサーも亦時々思ひ起して、人知れず昔懐しと、微笑む

で居るかも知れません。

パーサーから来た手紙は、多く散逸してしまつて、今は僅に五六通を「戀の記念」として、保存して居るに過ぎませんが、何れも情緒纏綿として、私の心をそゝるものばかりです。殊に楽しい折々の思ひ出を叙して、戀々の心を述べた條などは、宛然、詩か小説を讀む様な名文ですが、こゝでそれを朗讀することだけは、遠慮して置きませう。もとより私も折々は、楽しかつた月日を述べて、倫敦の空を懐しみましたが、日本人の女を妻に娶つて、日本の家庭に生きて居る今日此頃となつては、楽しい夢の様な思ひ出も、次第に淡く薄れ初めて、遂には消えて無くなつてしまふのかも知れません。

戀の思ひ出は何んな人にも共通でせうが、パーサーと私の戀は、空

想に初まつて空想に終つただけ、それだけ清い美しい物語になりませう。そして、二人とも人の妻となり、人の夫となつて居ながら、折々の思ひ出に微笑むことが出来れば、それを何よりの幸福とし、それを何よりの歡喜とせねばなりません。

長話をして失禮でしたが、私の「倫敦の思ひ出」は、この油繪の女主人公が、最も小説的興味に富んで居るのです。



平野丸の甲板

上、英國から歸つて

大正元年も七八日で暮れると云ふ師走の二十二日、新宿驛を發した甲州行の二等車内に、二人の青年紳士が姿を現した。背恰好から、齡の頃から、頭の刈り方から、髭の生やし工合まで、兄弟か從兄弟と思はれる程に能く似て居た。稍高い方は鼠色が、つた背廣に、黒のコートを重ね、茶の烏打帽と云ふ扮装で、少し低い方は茶の背廣に鼠のコートで、薄茶の中折をかむつて居た。

烏打帽の高い方は田川と云ひ、中折帽は高木と云つて、二人とも外

國から歸朝早々の年の暮を、諏訪の氷滑に興じ様として旅立つたのであつた。互に洋杖を持つて居るばかりで、折々、金口の巻蓑を吸つては、何か愉快氣に英語交りの會話に興じて居た。八王子から上野原邊までの平野の眺望には、武藏野の面影が残つて居て、林やら、丘やら、森やら、川やら、外國の風光に馴れた二人の眼にも、その總てが珍しい景色であつた。

暗い長い隧道が続いて居ると、安價な石炭の煤煙が、容赦なく車中に舞込むには、二人とも少からず辟易した。汽車が甲州路に入つた頃から、寒さは一しほ烈しくなつて、草や樹や葦屋根や田や畑には、如何にも寒國らしい様子が漲つて居た。二人は前からの會話にも疲れたらしく、甲府で辨當を食つた後は、軽い睡氣を催してウト／＼とし

て居た。「上諏訪、上諏訪」と呼ぶ驛夫の聲に驚いて、二人がプラットホームに降り立つたのは、其の日の午後二時を過ぎた頃であつた。東京を發つ時には霽れて居たが、上諏訪は曇つて、雪になりさうな空模様であつた。

牡丹屋の一室に通つて、その夜はピカデリーの思ひ出話に、更けるを忘れて興じ合つて居た。翌日は湖上に出て、半日を氷滑の遊びで暮さうとしたが、生憎に結氷の程度が危険であつた爲め、二人は空しく失望して旅宿に歸つた。

「このまゝ、東京へ歸るのも、何だか氣が利かないぢやないか」
「信州へ廻るのも大儀だし、甲府にでも寄つて忘年會かね」

二人は牡丹屋の二階で、五六日の間ゴロ／＼して居たが、二十八日

の夕暮には、甲府の旅宿佐渡幸の二階に、ハイカラ姿を現はした。年末だと云ふので、世間の人々は血眼になつて奔走して居るのに、生活に何の苦勞もない二人の青年紳士は、甲府でのん気に遊びながら、越年し様と決心した。二人の懐中を合すれば、まだ二百圓餘の金が残つて居たので、東京の宅へ電報を打つ必要もなく、別に差當つての用事も無い身の上であつた。

男振は好し、金は有餘るほど持つて居たし、洋行歸りの當座ではあるし、二人は夜になると宿を出て、紅燈の下で興じ合つた。二人が能く遊びに行つたのは、開峽樓と云ふ料理店で、其處には好きな玉突臺もあるし、少しは食べられる西洋料理も出来る家であつた。東京者の愛嬌ある女中が居て、巧に調子を合せたりするので、二人は好い氣持

になつて、毎晩の様に遊び興じた。田川の方は餘り飲めなかつたが、その頃の高木は日本酒よりも、強烈なウキスキーを好んで飲んで居た。「誰か美しい妓をね、二人で宜しい」

最初の晩から席に侍したのは、若大黒の吉次の抱へて、一人は千龍一人は君千代と云ふ、何れも一本になりたての妓であつた。二人とも美人と云ふ程ではなかつたが、未だ世なれぬ初々しさが、若い田川や高木の氣に入つて、田川は君千代を可憐く思へば、高木は千龍を可愛く思つた。そして、年の暮で忙しい世間の騒々しさを他所に見て、二人は大晦日にも、正月元日にも、開峽樓の客になつて居た。二人のお座敷には、影の形に伴なふ様に、必ず君千代と千龍の姿が現はれて、夜更くるまで賑ふのが例であつた。

中、甲府の藝妓千龍

田川と高木とは、英國以來の親友であるが、二人の性格は水と火ほどに異つて居た。資産家の長男に生れて、幼い時より苦勞と云ふものを知らずに人と爲つた田川は、何處やらにお坊ちやん風の我儘な點があつた。高木も亦、銀座で一二と云はれた商家の次男に生れたが、幼い頃から相應に苦勞を嘗めて、物の哀れを感じることは、人並よりも激しかつた。二人の氣風が、全然、異つて居るにも拘らず、二人は兄弟の様に親密にして、ロンドンから歸つて後も、仲の好い遊び友達であり、仲の好い飲み友達であつた。

お坊ちやん風の田川は、君千代を可愛がつて居ながら、一面の理性

を没却してまでも、戀心地に酔ふ男ではなかつた。若い女を相手に遊んで居る間にも、底の方には一脈の冷たさが流れて居る様な男であつた。それに反して高木の方は、何んな女にでも戀をすれば、それをかりそめならぬ遭逢として、先づ自分の方から熱情を傾倒するのが例であつた。一日でも一時でも、戀の相手に向ふに置いて、戀心地で居なくて、生き甲斐がないと云ふ程の男であつた。同じ様に同じ類の女を相手にして遊んで居ても、田川の心持は遊樂的で、高木の氣分は一

二人は甲府で新年を迎へて、東京へ歸つたのは七草の夜であつた。東京へ歸つてから後は、相變らず新橋や赤坂で遊んだが、田川の方は君千代の事なんか忘れてしまつて、

甲府も、一寸、面白かつた、ねえ」

と興がる位であつた。けれども高木は、東京へ歸つてからも、人知れず甲府の空を懐しんで、暇ある毎に千龍へ宛て、長い手紙を送つて居た。洋行歸りの若紳士の姿は、一本になつたばかりの千龍の眼にも、世の常の男ならず映つて、高木への返書には、何時も憎からぬ思のたけを口説いて居た。

その當時、高木はロンドンの或る新聞の通信を囑托されて、常に東京を中心として活動して居た。毎月の収入も相應にあつて、青年紳士としては、何不自由のない生活が出来身の上であつた。何時までも甲府の千龍に執着せずとも、美しい藝妓は常に高木の周圍に居て、その心を動かさうとして居たが、高木の念は甲府の空へのみ飛んで居た。

果は山川越えた數十里、不快な汽車旅行を事ともせず、毎週金曜日の夜、新宿を發つて、千龍の許へ逢ひに行く様になつた。甲府には土、日の二日滞在して、千龍と逢つた後、月曜日の朝歸京する様になつた。不快な隧道も、不潔な煤煙も、千龍に逢ふためには、何の苦勞にもならなかつた。土地の新聞紙は、高木と千龍の戀を傳へて、それが花柳界での大評判になつた事もあつた。

高木の甲府通ひは、その年の七月まで續いて、千龍との仲は熱くなり行くのみであつた。一人の女に關り合ふと、一向専念に熱くなるのが高木の癖で、その女と別れてしまふまでは、たゞ思ひ詰めると云ふ風であつた。その年の八月、俄の用向で北京へ行くことになつた時にも、高木の胸には甲府の千龍だけが戀しい忘れられぬ女であつた。横濱か

ら歐洲行の汽船平野丸に乗つた時にも、高木は其の甲板の上で手紙を書いて、遙に甲府の千龍へ寄せた。

「私は今、お前の平野丸に乗つて、横濱を出帆するところです、私の今度の航海は、お前が影に添うて居てくれるから、一路平安であらうと思ふ、二三ヶ月したら歸る、歸るまで壯健で居たおくれ、決して浮氣をしては不可いよ、私の好きなおるいちやん」

千龍の實名は、平野ゑいと云ふのであつた。北京行の船は女と同性の「平野丸」であつた。たゞ千龍の上をのみ思つて居た高木は、千龍と同名の平野丸の甲板に立つと、俄に千龍が戀しくなつて、遙に甲府の方を眺めたりした。

下の關ホテルに泊つた時にも、高木は一人旅の淋しさを、甲府の千

龍へ書き送つた。

「遅くても、十一月には歸る、歸つたら直ぐ行くから、浮氣をしないで、待つておいでよ」

かうした高木の思は、浮氣を何とも思はぬ千龍の胸にも、強く烈しくとゞいたことであらう。

下、思ひ出の長襦袢

高木が北京から歸つたのは、豫定の通り十一月の中旬頃であつた。歸京したら何を措いても、先づ甲府へ行つて、千龍に逢ふべきであつたが、高木は東京にのみじつとして居た。僅に三月ほど別れて居た間に、千龍を思ふ高木の心は、次第に冷たくなつたのであつた。

忘れてしまふ程の浮氣男ではなく、時に觸れ折に際しては、思ひ起して居ても、用務を捨ててまで行くほどの熱心は、何時の間にか冷却して居たのであつた。死ぬるほど愛し合つた仲でも、月日の隔りは二人の仲を割いたり、二人の心を健忘性にするものと見える。歸つた當座は、手紙の取り遣りをして居たが、それも時経ては三度が二度になり、二度が一度になつて、果は何時となしに忘れてしまふのが、かうした戀の終局であるらしい。

忘れてしまつても、時々思ひ起しては、

「今頃は何うして居るであらう」

と噂し合ふのが、また何とも云へず楽しいものである。高木も其の後のいろんな女に關係したが、千龍のことは、さすがに忘れてしまふこと

が出来なかつた。相變らず甲府で左り褌を取つて居るか、他の土地へ買はれて行つたか、人の妻になつて居るか、其の後の様子が知りたいと思ふことも度々であつた。

それから三年を過ぎた大正三年の十月、高木と三澤と云ふ青年畫家とが、帝劇を見物した時、幕間の廊下で偶然、甲州の知人に逢つた。その時、高木の頭腦に、卒然として浮かんだのは、藝妓千龍の身の上であつた。甲州の知人も、少しは遊んだ男だけあつて、料理屋や藝妓の噂には、相應の興味を有つて居た。

「千龍と云ふ妓が居たてせう、少し面長だけれど、背恰好のスラリとした、眼に何とも云へぬ魅力を有つて居た妓が……今も出て居ますか、それとも他へ變つたてせうか、君は御存知ないですか」

斯う高木が尋ねた時、甲州の知人は笑ひながら、
 「千龍、居ました、居ました、お座敷の賑かな、陽気な妓でしたねえ。あれは何でも、東京に好い人があつたんですが、其のひと別れてから、一時、甲府在の人に落籍されて居たさうです。今は何でも横濱に出て居るとか云ふ噂です、よ」
 と話した。そして横濱に出て居るとのみで、何家の何子と云ふのか、それは甲府に歸りさいすれば判るであらう、とのことであつた。
 高木は俄に千龍が戀しくなつた。餘儀ない事情があつたにせよ、普通の藝妓が歩く平凡な道を、千龍も亦歩いて居るのだな、と思つた時、何だか千龍が可愛相になつた。出来ることなら久し振りに逢つて、別れて後の事どもを、語りもし聴いても見たいと思つたが、何家の何子

と云つて居るやら、それが判るまでは、當分、逢へないことだと斷念めて、たい、過ぎた日の夢を現に描いて居た。
 それから三日目の午後二時頃、高木の事務所へ電話をかけて、高木を呼出したものがあつた。取次の給仕が、笑ひながら、
 「高木様、電話で御座います、御婦人の聲で、甲州の何とか云つて居られます」
 と云つた時、高木には其の電話の主が誰やら、容易に思ひ出せなかつた。何かの間違ひ位に考へて、受話機を左の耳に當た時、
 「モシ、モシ、あなたは高木さん、え、高木さんに違ひありませんか。妾、甲府の平野よ、あら、厭だ、千龍よ。え判つて、判らない、千龍事平野ゑいだわ、よ。何て自烈體ンでせう、え、え、妾

今、新橋へ着いたとこなの……。横濱から……。赤坂へ……。未だ極らないんですけれど、多分、××家から出ることよ。今晚逢へない？何處でも宜いわ、いろ／＼お話したいことがあるんですもの。あなた御都合は悪くなくて、ほんとに久し振りだわ、ねえし。

と、女の聲で続け様に浴せかけられた。そして聲の主が昔の千龍であると判つた時、高木は餘りの懐しさと、聲を通じて直覺し得た女の激しい變り様に、我知らず涙を浮かべた。

千龍は間もなく赤坂の〇〇から、花香と名乗つて現はれた。別れてから三年の間、高木が夢現に描いて居た昔の千龍の面影は、三年の月日と共に消え失せて居た。滑かであつた其の肌も、數多い男の汗に瘦せて窶れて、荒み切つて居た。――

たゞ、四ツ目くづしの長襦袢のみは、千龍の昔も花香の今も、美しく艶かに、高木の眼を喜ばせた。

その後の事は、餘り多くを云はなんでも宜からう。――



謎の伯爵夫人

上、沼津から江尻へ

「出来事は極めて單純だけれど、たとへ一日でも半日でも、僕の感情を弄ばれたかと思ふと、それが残念で堪らない。従つて彼の時の事は、僕の一生涯に忘れることの出来ない、一つの謎として残つて居る。僕は其の謎を君達に解いて貰いたいと思ふのです」
かう云つて、語り始めた佐川の眼は、燃える様にかゝやいて居た。

それは佐川の妻子が、沼津の實家へ避暑に行つて居た一昨年九月の

出来事であつた。七月上旬に妻子を新橋驛へ見送つた頃には、何の異變もなかつたが、八月中旬の暴風雨で、箱根隧道附近は、汽車が不通になつた。九月上旬、妻子を迎ひに行つた佐川は、横濱から汽船に乗つて、清水港へ上陸した後、沼津へ引返さねばならなかつた。

久し振に妻子に逢つて、二三日を沼津の千本松原で過した佐川は、細君と娘の子二人と女中二人、一行六人で沼津を發つた。沼津を朝の六時過ぎに發した明石行の一等車で、江尻まで行つて、清水港からは聯絡船の高麗丸か會下山丸かで、横濱へ歸る豫定であつた。

一等車の中には、佐川の一行六人の他に、貴族らしい夫婦が、その愛嬢や書生一人と女中三人を連れて乗つて居た。同じ一等車に乗つて居ても、平民の佐川一行と貴族らしい一行との間には、何か知ら一重

の垣が出来て、互に目禮一つせず、眺め合ふのみであつた。

貴族らしい一行が、××伯爵夫妻であることは、その旅行鞆に記した英語の花文字で、直ぐ佐川は發見した。

「××伯爵の夫人でせう、婦人畫報や新婦人などに、能く出て居てよ、あの夫人……」

佐川の妻も斯う言つて、貴族の妻らしく着飾つて居る伯爵夫人の風姿を、遠くの方から眺めて居た。

伯爵は新聞を讀んで居たが、伯爵夫人は佐川の方を見ては、何か知ら女中達に向つて、いろんなことを取沙汰して居る様子であつた。

「あの人達は、二等へ乗る筈なのを、間違へて一等へ乗つたのぢやなく……」

佐川の耳には、かうも取沙汰して居る様に聞えた。元來、佐川は其の生立ちやら、幼い時からの境遇やら、いろんな本を讀んだ結果やらで、貴族と金持とを蛇の様に嫌つて居た。その燃える様な情感の底には、一種の社會主義者が抱いて居る様な、富貴を呪咀するの反感が、常に力強く流れて居た。従つて伯爵夫人の他を蔑む様な舉動や、これ見よがしの態度を、苦々しい事に傍觀して居た。

沼津から江尻まで、二時間足らずの汽車で、伯爵夫人は様々な舉動をして、伯爵夫人たる自分の存在を、佐川の前に誇つて見せた。夫人は先づ小さい金色をした捲簾入から、金口の細い捲簾を出して、紫の煙を美味さうに吹いて見せた。そして今度は金縁の小さい手帳を出して、總金色の小さい萬年筆で、何か知ら書き初めた。頸にかけた細

い金の鎖、左右の指に嵌めた金の指環、金の義齒、金の櫛、金の簪、これが夫人の身を飾る總體であつた。そして一種、妖艶の情を含んだ眼の色や、蓮葉らしい口許や、高慢らしい鼻筋や、強て氣高さを裝ふ表情などが、何とはなしに佐川の悪感を惹いた。

「何と云ふ厭な女であらう、これが貴族の娘で、當世の伯爵夫人と仰る方であらうか」

佐川はさう思ふと、矢も楯も堪らなくなつて、唾氣でも吐きかけて遣りたい様な氣持になつた。

「虚榮の女！憎むべき虚榮の女！。こんな女は一生の見せしめに、スボイルして遣るに限る！」

アンドレーエフの小説の一節に、強盜強姦の大悪人が、大赦の恩典

に浴した歸國の汽車中で、一人の婦人を見て兇暴の心動き、婦人が下車すると自分も亦下車して、遂にこれを姦して捕はれたと云ふ條があつた。——佐川は自分が露西亞人であつたならば、或は斯うした危険な心持になるかも知れない、と思つて慄然とした。

何も知らぬ×伯爵と、何も知らぬ佐川の妻とは、新聞を讀んだり雑誌を見たりして居た。佐川の注意は、伯爵夫人にのみ集つて、三三四だと云ふのに、二十六七にしか見えない若扮装が、遂には捨難い色香の感を起させた。夫人も亦、肥満した伯爵の方へは眼も遣らず、若くてスラリとした佐川の方へ、折々、意味有り氣な秋波を送つたりした。二人の眼と眼が、電光の様に相合ふ刹那もあつた。

汽車は一時間餘で、江尻驛へ着いた。そこから清水港へ出て、佐川

の一行が、聯絡船高麗丸の一等室に入つた時、×伯爵の一行も亦、高麗丸の一等船客になつて居た。

そして、最初の間は、厭で／＼ならなかつた伯爵夫人が、何時の間にか慕はしい人になつて居たのに氣付いた時、佐川はそれを、自分の敗北だとは思ひたくなかつた。——

中、高麗丸の一等客

船の嫌な佐川の妻は、船室に入ると直ぐ横になつて、死んだ人の様に身動きもしなかつた。佐川は三つになる娘を抱いて、甲板を散歩した後、廣い食堂に入つて遊んで居た。

そこへは、×伯爵の愛嬢で、十一二の可愛らしいのが一人、ニコ

く笑ひながら入つて来た。そして佐川の娘を見ると、

「まア、可愛らしい嬢ちゃん、お幾歳なの……。妾、だつこして上げませう、ね、ね」

と云つて、佐川の手から娘を奪ふ様に取つて、可愛い、可愛いと頬ずりをした。貴族の妻と云ふことを誇り顔の伯爵夫人にも、こんな無邪氣な令嬢があるかと思ふと、佐川は何だか其の令嬢が可愛くなつて、

「嬢ちゃん、お幾歳、何と云ふお名ですか」

なんかと、相手になつて、暫くの間遊んで居た、ところへ、伯爵の女中が来て、佐川へはお辭儀一つせず、

「お嬢様、そんな所へおいで遊ばしてはいけません。さア、此方へ入らつしやいまし」

と、突慥貪な言葉で云つたので、佐川はまたムラ／＼と、一種不快な反感を起した。

「平民の子と遊んでは不可いのか、ね」

と口まで出たところへ、衣ずれの音がして、伯爵夫人が入つて来た。強い香水がブーンとして、何とはなしに佐川の心をときめかした。

「お前は、あちらへ行つておいで……」

夫人は斯う云つて女中を追ひ遣つた後、佐川へ一寸目禮して、佐川の腰掛けて居た隣の椅子へ腰を下した。何んな場合でも、伯爵夫人たるの品位を落すまいとするのが、この夫人の全努力であるのか、言葉も交さねば莞爾ともせず、すまして愛嬢の頭髪を弄んで居た。

佐川は、柔い羽布圍か何かで、其の全身を包まれた様な氣持にな

つて、徒に呼吸がハズむのみであつた。廂髪に結つた夫人の横顔は、蠟細工の様に輪廓がフツクリとして、色白の面長な、眼に何とも云へぬ情がこもつて見えた。常に制し切れぬ感情の奔放りを、伯爵夫人である云ふ自覺で、僅に抑へて居る様に見える女であつた。その煩悶も、その苦痛も、自制と云ふ事の他には、殆ど何ものも無い女の様に佐川の眼には見えた。

草子の上に左の腕を置いて、右の手で巻簾を吸つて居た佐川は、俄に左の腕が重くなつたのに氣づいた。伯爵夫人の右の柔い腕は、佐川の左手に蛇の様に巻付いて、指と指とが觸れるばかりになつて居た。佐川は俄にポーと上氣して、夫人の横顔を偷み見たが、夫人は飽く迄も神色自若として、素知らぬ顔で佐川の指を弄んで居た。

「輕々しい悪戯をする女だ！」

と一度は思つて見たが、それは決して不快な悪戯ではなかつた。佐川も亦、殆ど無意識に、夫人の手を握り止めた。

「あら、お父様よ、入らつしやいな！」

この時、突如として、××伯爵の姿が現れたけれど、夫人は顔色一つ動かさず、平然として食堂を出て行つた。

言葉一つ交したてなく、笑顔一つしたでもないに、世にも奇怪にして解し難いのは、夫人の恚うした態度であつた。其の場限りの好奇心か、出来心の悪戯か、何れにせよ伯爵夫人の態度としては、許され難い戯れであり、解き難い謎であつた。妻子を連れた佐川の平和な旅も、この事あつて以來、軽い一つの苦惱を加へたのであつた。

その日の暮れ方に、高麗丸は横濱港へ着いて、乗客は皆、先を争つて甲板に出た。××伯爵の一行も、甲板へ現れて居たが、夫人は佐川の姿を見るや否や、忘れ物でもしたかの様に、周章で船室の方へ降りて行つた。この時、佐川も何かに引かれる様な心地で、人目に付かぬ様に、婦人の後を追うた。

夫人は暗い船室の入口に、氣高く清く美しく、女王の様に立つて居た。そして、初めて莞爾として、

「また、逢ひませう、ね」

と唯一語、佐川の顔を凝と視た。佐川はもう、堪らない様な氣持になつて、夫人の手を堅く握りしめた。——夫人は暫くの間、佐川の爲すが儘に任せて居たが、やがて平氣な顔をして、甲板の方へ出て行

つた。さうした場合にも、夫人の一舉一動は、少しも平氣の度を失はず、立派な伯爵夫人であつた。

佐川は氣拔がした様な顔をして、妻子と共に上陸して、妻子と共に横濱から汽車に乗つた。同じ一等車の中には、××伯爵の一行も乗つて居たが、夫人と佐川とは、新橋驛へ着くまで、遂に一語も交へる機会が無かつた。

伯爵夫人の一行は、迎へに来て居た自動車に乗つて歸り、佐川の一行は電車に乗つて歸つた。電車の中で、佐川が袂に手を入れた時、現はれたのは一枚の名刺であつた。

「×××子」と印刷した裏へは、ローマ字で、「イツマデモ、オボエテキマスヨ」と、萬年筆で、記してあつた。

其の後、佐川は、伯爵夫人にめぐり逢ふべき日を、それとなく楽しみにして待つて居た。――

下、新橋驛頭の再會

それから一年の月日は、夢の様に過ぎて、伯爵夫人に逢つた其の月その日が来た。佐川は一人、書齋の中に入つて、例の名刺を取出しては、「何時までも覚えて居ますよ」とある羅馬字を讀んでは、人知れず懐しい思に耽つた。

佐川が若し新聞か雑誌に關係して居て、公然その夫人を訪問しても、更に怪しまれない身分であつたならば、佐川は既に伯爵夫人を訪ねて、高麗丸の夢を繰返して居たかも知れない。けれども佐川は、一商館の

一課長であつて、伯爵夫人とは何の交渉も無い仕事の中に、没頭して居る身の上であつた。じつとして待つて居ては、一年過ぎても二年経つても、伯爵夫人には逢へない身分であつた。

いろ／＼と考へた末、佐川は伯爵夫人の出入をしさうな音楽會や帝劇などへ、機會さへあれば行つて見る様になつた。そして夫人の肖像の出て居る婦人雑誌や、その談話を掲げてある雑誌は、一つも見落すまいと注意した。夫人から投げ掛けられた謎を、明かに解いてしまふまでは、夫人の一舉一動に注意して、再會の機會をつくらうと努めた。逢つての後が何う成り行くことや、そんな事には考へ及ぶ暇がなく、たゞ逢ひさへすれば、満足であると思つて居た。

「こんな心持も、一種の戀と云ふのかも知れない。戀にしては、許さ

れ難い戀であるが……

斯う思つて、自分の無謀な企圖を、自分で嘲つて見たりしたが、夫人に逢つて見たいとの願は、容易に忘れ去ることが出来なかつた。けれども手紙を送つたり、電話をかけたりして、自分から進んで再會の機會をつくるだけの勇氣が、佐川には何うしても出なかつた。何事も運命にまかせて、時が来るまで待つより他に仕方が無い……と斷念めては見るもの、高麗丸船中の刹那を思ひ起して見ると、何うしても一度逢つて、此の事件の結末を付けてしまはねば、安心する事が出来ない様な氣持がして居た。

伯爵夫人に對して、こんな心持で居ながら、佐川の月日は決して閑散ではなかつた。久しく別れて居た田舎の藝妓が、突然東京へ住み換

へしたとて、電話で呼出されて逢いに行つたり、何某侯爵の手活の花になつた藝妓と、一所に芝居見物に行つたり、佐川の「夜」は相應に忙しかつた。夫婦になつて足掛七年、一度も外で泊つた事のない佐川が、田舎から來た藝妓との逢引で、遂に待合で一夜を明かしたのも、その頃のことであつた。佐川の妻が、たつた一度の外泊を非常に怒つて、愛嬢と女中とを連れて、佐川へは無斷で沼津の實家へ行つたのは、去年の十一月末であつた。

佐川は妻の我儘な嫉妬沙汰を、苦々しいことに思つたけれど、歸宅するまで打捨て置くほどの辛抱は出来ない男であつた。久しく妻の實家へも不沙汰して居たので、それとなく迎ひに行かうと決心して、十一月末の寒い朝、取るものも取敢ず、新橋驛へ馳け付けた。

午前八時半發の一二等最大急行列車には、多くの紳士や貴婦人が乗つて居た。ブラットホームには見送りの人々が群集して、そこにもこゝにも別れの挨拶が取交されて居た。その中には、美しく着飾つた貴婦人の一團二三十名が、一等車の前に立つて、何事か私語き合つて居る様が、何となく物々しく見えた。

佐川は最後の展望車に乗つて、見送り婦人の一團を眺めて居たが、中に背のスラリとした、色の白い婦人の後姿を發見した時、

「や、伯爵夫人、伯爵夫人。」

と、我知らず小さい聲で叫んだ。そして夫人の身體が動く方へ〜と眼を離さずに注意して居ると、夫人の視線も何氣なく展望車の方へ向いた。待設けて居た佐川の眼と、何心ない夫人の眼とは、こゝに一年

振で漸く逢ふことが出来たのであつた。

夫人は顔色一つ動かさず、佐川の方を凝視めてニコとした。

「萬歳、萬歳、萬歳、萬歳、萬歳。」

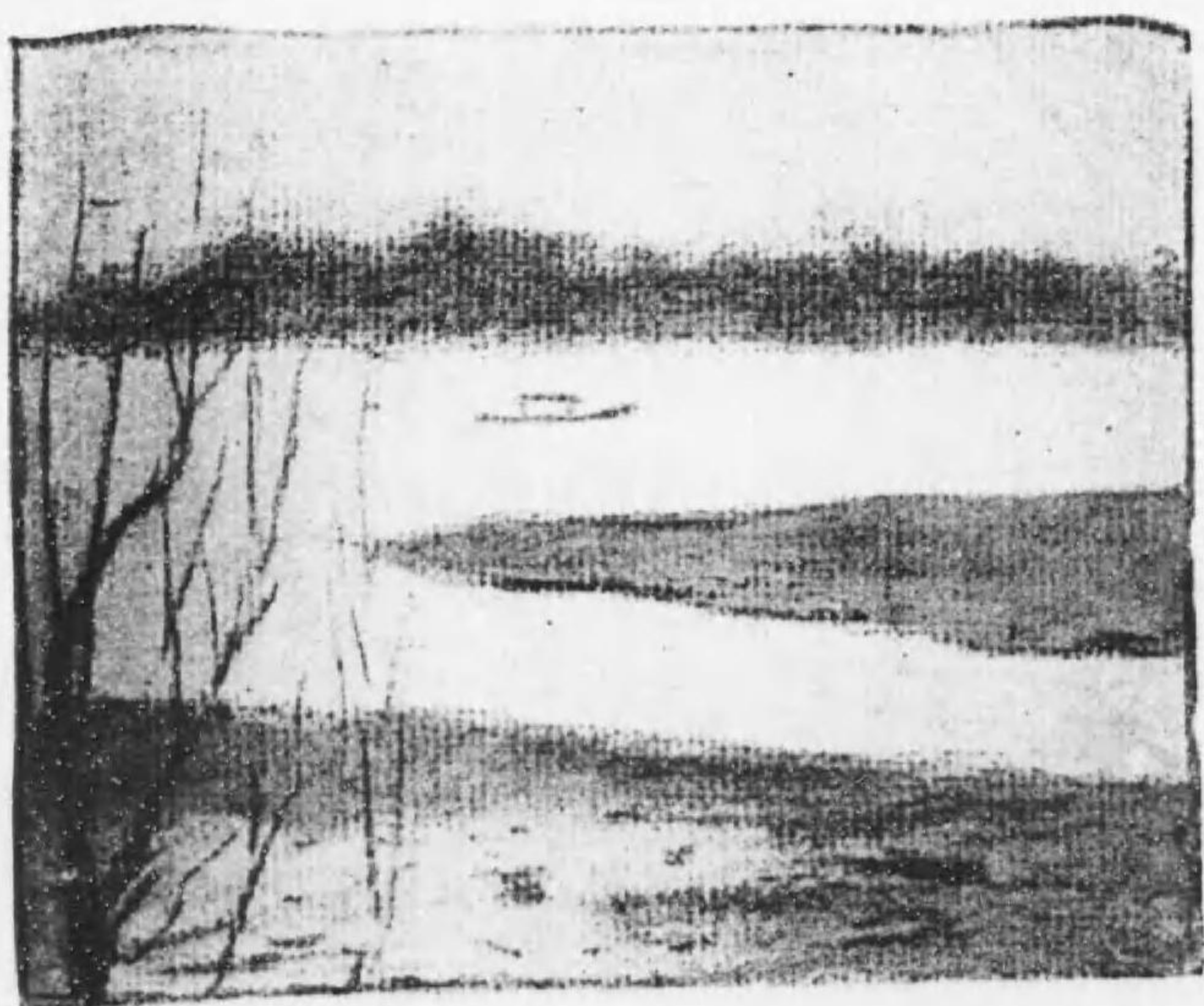
汽車が動き出すと、四邊は更に騒然として、婦人達の一團は、ハンカチーフを出して、手に〜それを振つた。佐川は展望車から顔を出して、夫人の姿が見えなくなるまで、白いハンカチーフを振つた。夫人も亦桃色のハンカチーフを、何時までも、何時までも振つて居た。

——伯爵夫人の振つたハンカチーフは、單り旅立つ貴婦人のためのみではなく、佐川を見送りの意味があつたかも知れない。

伯爵夫人が投げた謎は、かうしてまた今日に至るまで、佐川の胸には解けずに居る。——

佐川は語り終つて、淋し氣に笑つた。

「何も至難な謎ではないが、僕は此の解と心とを得なければ、何だか胸に支へて居る様で、氣が、りでならない。伯爵夫人にとつては、一時の戯れであつたかも知れないが、僕はさう了解するよりも、何處までも夫人自身の謎であり、また僕の謎として、それを解き得るまで、忘れずに居たいと思つて居るのです」



芝居茶屋の女

一、戀を戀する人か

我々の仲間では、笹村と云ふ其の姓を呼ばずに、富さん〜と其の名を呼んで居る、會社員の笹村富夫君と。武と云ふ名も呼ばねば、三宅と云ふ姓も呼ばずに、三さん〜と云つて居る、若い洋畫家の三宅武君と。松崎とも云はねば、天民とも呼ばず、松ちやんと云つたり、天ちやんと呼んだりされる松崎天民と。――

この三人が、紀元節の翌夜、所もあらうに多摩川電車の終點、夏ならば涼しい風の吹きさうな多摩川のほとり、割烹店喜月の樓上で、小

酌を催した折の事である。鶏卵をからませた白魚鍋に、鯛のおさし、焼海苔の極く淡泊と、櫻正宗か何正宗かに軽い酔を覚えて来ると、談話は例に依つて「戀物語」にはづんだ。舊曆二十九日の空は暗澹として、寒さうな星がキラ／＼して、何處かでポーと云ふ睡む相な汽笛の音が聞えたり、汽車の軋り行く響が聞えたりする程に、四邊は陰森として何となく氣の滅入りさうな晩であつた。

「何所かのお通夜にでも行つてる様ですね」

洋畫家の三さんが、皮肉らしく云つた様に、ほんとに浮き立たぬ晩であつた。男のために苦勞をし抜いたらしい世帯くづしの女中と、戀も浮氣もこれかららしい十八九の廂髪とが、交る／＼お酌をしながら、「ちよいと、何ちらからのお歸途なの、お珍しいでは有りませんか、

殿方ばかり……」
と笑つた様に、三人とも恐ろしく悄氣返つた様な、屈托の有りさうな顔色をして居たに違ひない。

「いくら飲んだつて、酔はないばかりぢやない。こんな晩には、飲んだ酒が冷たい涙になつて、自然に流れて出るばかりだ……」

天ちやんが斯う云つて、舌打をすると、

「何の積で此んな所へ来たんだらうねえ。月も無いし、花も無いし、何うかして居るぜ、三さんも松ちやんも富さんも……」

富さんも斯う云つて、ため息を吐いた。

「女が居ないからせう、美人がね」

三さんは獨で斯う極めて、萬事を呑み込んでる様な顔をして居る上

に、清元の三千歳を唄ひたい様な、贅澤な顔までして居た。

「天ちゃん何かは、行き當りばつたり、何んな女でも宜い、刹那の慾望を遂げさへすれば、他に何の要求も無さ相な類の男に、誤解されても居るし、また誤解されても仕方の無い様な、放縦な態度をして居ますが、富さんは違ひますね。金さへ出せば何うにでもなる種類の藝妓でも、一二度逢つた位では、手も足も出ないと云つた鹽梅で、其の勇氣の無いのにも驚きますが、また苟くもせぬと云つた風の所には、平生から密に敬服して居ますよ。富さんは戀が無くては女を何うする事も出来ない男で、天ちゃんとは一寸、趣致を異にして居ますねえ」

三人の中で最も酒に強い三さんが、いの一に酔ひ初めて、いの一

番に浮かれさうな形勢になつた時、廊下一つ隔つた隣室に、男女一組のお客様があつたらしい。そして蓮葉な女の笑ひ聲と、重々しい濁つた男の笑ひ聲とが、斷えてはまた續いて聞えた。

二、經驗は尊むべし

「なアに僕だつてね、伯林の賣春婦に關り合つた事もあれば、不見轉を何した經驗もあるけれど、唯、お手輕に何する氣分になれないだけのことさ。未だ三十になるやならずだもの、女に就ての思ひ出も色よりは戀の方が多いし、また戀物語の方に波瀾がある。天ちゃんちや無いけれど、其の一をホーランド公園附近と云ひ、其の二を兄貴と僕と彼の女と云ひ、其の三を新橋藝妓筆子の死、其の四を芝居

茶屋の女、其の五を伯爵夫人の面影と云ふ位のローマンスは、僕の前半生にも有りましたよ！

隣室の男女のお影様で、此方の十二疊にも、酒の香と貰の煙とが漲つて、そろ／＼遊蕩的情調になつて来た。富さんは背のスラリとした色の浅黒い好男子で、濃い髪を右から七三に分けて、狭い額の左方に渦を巻かせ、鼻下の濃い髭を短く刈つて居る。口ほどに物言ふ眼に一種の情味を添へて居るのが、戀は曲者、若い富さんの前半生を語り顔である。

「お通夜の晩が、大分面白くなつて来た様ですわね。何うです松ちゃん、貴君の人生探訪の材料になるぢやないですか。畫題としては、ホールランド公園附近も好いし、伯爵夫人の面影も佳い様ですが……。何

れか一つね、富さん、酒の肴にもなりますよ！

三さんの尻馬に乗つて、天ちやんまでが、

「兎に角、聴くことにし様ぢやないか。五つの中ではさうだね、芝居茶屋の女が宜ささうぢやないか。短くて、面白くて、要領を得て居て、波瀾があつて、小説的で、小説よりも興味のある事實なら、正に僕の領分内に入れるべきロマンスだもの……」

と云つたので、富さんも黙つて居る譯には行かなくなつた。年増の世帯くづしの方は、

「おや、おや、御馳走様ですわ、ね」と云つて笑ひ、十八九の廂髪の方は、

「芝居茶屋の女つて、へえ、美人ですの」

と不思議さうな顔をしたが、そんな事は何うでも宜い。女中達は静に謹聴して、富さんの此れから話す出来事の中に、女中達自身の姿を探ね出して、胸に手を當てさへすれば宜い。何んな事でも、其の経験はかりそめて無く、また卑しむべきでは有るまい。

多く飲けぬ口の富さんは、シトロンを取寄せて飲み、三さんはビール、天ちやんは酒を飲みながら、語つたり聴いたりした。これが築地や木挽町の待合で、傍に紅い蹴出しが居て、甲高い聲で話したり、啞者の様な手振り身振りて、他の客や座敷の噂をしたりするのを見聞して居たのなら、三人ともそんな心持にはなれなかつたらう。幸にして星暗い多摩川の一夜は、三人の氣持を同時にしんみりさせて、語人の上にも、聴く者の上にも、遣る瀬ない思を漲らせた。

「その女との關係は、去年の暑い七八兩月間だけで、思へば短い果敢い遭逢でしたよ」

富さんは斯う云つて、「芝居茶屋の女」と自分との一切を、二人の前にさらけ出した。——

三、新富座の總見物

「一昨年の冬、新富座で新派劇を演つて居た時、僕の關係して居る會社で、河合武雄のために、總見をした事があつた。本家茶屋に事務所を置いて、其の日の帳場は僕が受持つ事になり、看客席圖と首引で随分、忙しい思をしたが、其の代り一つの獲物があつた。

御承知の通り新富座の本家茶屋では、男の案内人を一切使はず、十

六七から二十四五までの女を、案内人に使つて居るが、十人餘の中に唯一人、何とは無しに僕の心を惹いた十八九の女が居た。取立て、云ふ程の美人ではないが、中肉中背の何となく色ツぼくて、色こそ稍淺黒けれ、眼に何とも云へぬ風情があつて、男の心を惹かねば置かぬと云ふ風の力のこもつた女であつた。僕と一所に帳場に居た同僚達の眼にも映つたと見え、互に目引き袖引いて、「好い女ぢやないか、何と云ふ名だらう」と、取沙汰したものであつた。

女の名も宅も知らず、其の夜は其の儘、碌に言葉を交す機会も無く別れたのみであつたが、其の日からと云ふものは、何かに付けて女の事を思ひ起す様になつた。妻もあれば子もあるのに、と笑ふかも知れないが、若い僕の昨日今日に、斯うした戀心地があつたとて、別に

大した罪でもなく、大した道樂でもあるまい。自惚でも何でも無いが、初めて逢つた其の一夜、女の方でも心有り氣に、僕の顔をチヨイ〜と偷み見ては、心を蕩かす様な秋波を、惜し氣もなく浴せたものである。僕は其の後、市村座へ見物に行つた時、茶屋の三洲屋から座の方へ行くと右側の、何とか云ふしる粉屋の女中が、新富座の女に似て居る事を發見して、せめてもの心遣りにして居た。それから後、去年の六月、再び新富座で總見をする迄は、半年の間、女に逢ふ機會が無くて打過ぎたが、いよ〜總見の其の日になると、僕の心の高波は、怪しくも亦慄ひ戰いた。

僅に半年ほど逢はないで居た間に、女はもう成熟し切つて、化粧の仕方や着こなしに、「芝居茶屋の女らしい姿を見せて居た。其の日も

僕が帳場を受持つたので、傍に人の居ない折を見ては、女の方から寄り添うて話しかけるし、例の微笑みと秋波とを、半年前よりも鮮明に浴せて来た。本郷三丁目邊に、物堅い父と一所に暮して居るお近と云ふ女である事が判ると同時に、僕は密かに覺悟を極めて、此の女を正式に妾として圍はうと思つた。そして出来る事なら、今夜にでも人目を忍んで女に逢つて、女の口から明らか様に、其の思惑を聞いて置かうと思ひ立つた。

芝居が打出て後、同僚達が萬安に行かうと誘ふのも斷つて、僕は唯一人、尾張町のライオンの前に立つて、新宿行の電車を待つともなく待つて居た。其の時、僕の心の底には、お近の姿があるばかりで、妻も無く子も無く、家も無く世間も無く、宇宙も無かつた。

笑つてはいけません。妻子が有ると云つても、二十八歳の僕だもの、戀を戀する氣分になつて歩くのに、何の不思議があるものか。

四、妾になつてくれ

お近の一顰一笑に囚はれてしまつた僕は、今にもお近が来る様な氣持がして、あても無いのに十二時近くまで、銀座の四角に立つて居た。天金の方へ行く三人連の女の一人が、お近の後ろ姿に見えたり、品川行に乗つた女の横顔を、お近でないかと眺めたり。

青山行の赤電車が、ライオンの前で停つた時、運轉手臺から降りたのが、嬉しや夢現のお近であつた。僕も意外に思ふたし、女も餘程驚いた様子であつたが、晴れて言葉を交すにしては、憚り多い巷であつ

た。それにお近には男の連があるらしく、「本郷へ、送つてあげ様か」と小聲で云へば、「え」と答へただけの笑顔であつた。新宿へ歸る僕が、本郷三丁目まで同じ電車で送りながら、車内にも人目があつて、其の夜は其の儘の「左様なら」が悲しかつた。もとより「かね康」も寝て居たので、お近の好きな物を買つて遣る事も出来ず、思へば本意ない別れてあつた。

可愛い妻も有れば子も有つて、それが厭でなく憎くも無いのに、斯うした戀に現の男心を、浮氣の一語で貶し去るのは、一を見て二を思はぬものであらう。僕はお近に參つてしまつて、先づ天賞堂で二十餘圓の指輪を買つて送り、次で午前十時を期して、須田町で落合はうとの手紙を送つて置き、其の日は朝から午後一時まで、親不知子不知の

須田町に立ち盡したりした。それにしても心有り氣な女の舉動、待ちほけさせられた怨みを抱いて、久し振に新富座の茶屋に入り、久し振に大阪の義太夫を聞いたのは、それから間もない後であつた。恰も宜し、お近在僕の番に當つて、茶菓を持運んだ時の嬉び様は、「今夜、歸途に、數寄屋橋の公園前で、待つて居て下さい、いろ／＼お話ししたいことがあるわ」の一語であつた。一人の連を巧にまいてしまつて、公園前で蚊に刺されながら待つて居ると、十二時近くにお近が来て、「待つたてせう、随分、濟まなかつたわ、ねえ」と云ふ次第。

今夜は溜池の伯母の許で泊ると云ふので、それから歩きながら話さうと、赤電車過ぎた夏の深夜、初めて二人の世界となつた。須田町で待ばけの一條やら、指輪のお禮やら、今夜お目に掛れやうとは、の捨

臺詞が濟んだ後、僕は初めて心の底を打明けた。大久保の家には妻もあれば、娘と男の子二人ある身の上、晴れて夫婦の縁では無いが、妾にならば差支無いであらう。然るべき家を持たせて、月々の仕送り三十圓と、他にお父さんの手當月二十圓だけは出すが、此の戀この思を遂げさせてくれと、呼吸さへはづんだ。

女の返事は意外も意外、妾には種々事情があつて、晴れてお目に掛けることは出来ない身の上。何處か二階借でもして下されば、月に何度か日を極めて、お目に掛るより他には、氣儘になれない身體ですわ。を聞いた時にも、僕はお近を獨身と信じて居た。

其の夜も其のまゝ、別れたのみで、心は許し合つて居ても、身體はまだ他人であつた。

五、多摩川の月夜に

富さんは此處まで語つて来て、一寸一息と云ふ形で、シトロンを一氣に飲んだ。三さんは酔うて居るのに、當面の聴者になつて、「ふん」とか「さう」とか調子を取つて居た。行儀の悪い天ちゃん、横に寝るべつて蕨を吹いたり、女中にお酌をさせて飲んだり。隣室の男女はもう静まり返つて、階下の時計が九時を打つた。

「大變……、長物語のおのゝ氣、ねえ」

と年増が云へば、十八九の廂髪も、

「面白いわ、それから何うして、え」

と笑つた。富さんは、ニヤリ／＼と興がりながら、

「これからが大變なんだよ、何時か一度、天ちゃんに書いて貰はうと思つて、日記や、手紙やら、材料は總て持つて来た。これから多摩川の月夜、風雨の江の島になる順序だが、面倒臭いから日記を朗讀し様か。ねえ、三さん、天ちゃん……」

と云つて、小包の中から「大正三年の日記」を取り出して示した。便宜上、其の數節を抜萃して、富さんとお近と戀愛状態が、其の後どんな風に發展したかを見やう。日記は七月と八月とで、總て簡約な文章體になつて居るが、必ずしも、悪文では無いらしい。――

七月二十五日、お近に手紙を出す。

去年の暮、初めて彼女の女を見初めし時は、潔き處女の色ありき。今年六月、半年振りにて逢ひし時は、既に去年の娘にてはあらざりき。

彼の女は既に男を知り、男を解せるに相違なし。芝居茶屋の女に清きを求むるは、求むる者の愚なり、痴なり、妄なり、暴なり。

七月二十九日、お近より手紙来る。

御一緒に他所へ行くにも、着て行く着物なく、恥しく口惜しく候、憐れと思し召さば、三越か白木にて、單衣と帯とを……と記しあり。午後、八丁堀の古着屋へ赴き、藝妓物らしき中古單衣、帯など、二十金足らずにて購ひ、直に小包にて送り届く。三四日の後、一緒に多摩川へ遊びに行く旨の手紙をも添へたり。

八月××日、樂しき其日となれり。

午後五時、有楽町の停車場にて落合ふ。縞物の單衣に、白味勝ちし帯、赤、桃色、水色、銀杏返し、白粉、香水、見擬ふばかり美し。

澁谷にて多摩川行電車、七時過ぎ着く。二子を渡りて、龜屋へ落着き、入浴、晚餐、愉快極り無し。折柄、月色水の如く、流れ清く、風涼し。お近、十二三歳の小娘の如く喜び、はしやぎ廻る。宿に命じて、小舟を中流に浮ぶ。東京に近うして、東京に遠き心地す。船頭に二圓與へて上陸せしめ、河上、舟中、たゞお近と予のみ。詩吟聞え、都々逸聞えなば、詠へ向の情景なれど、事實は必ずしも然らず。お近の眼燃え、予の聲おのゝくのみ、「何時までも斯うして居たいわ」と云ふお近の態度、心も身も、予の有となれり。天に月あり、地に我等二人の戀あり。あゝ此の夜、此の景、此の情、願はくば永遠にあれ。――

「折柄、船頭さんが歸つて來たのでね、二人は其の夜も、他人の儘で

別れたんです」

と、笑ひながら富さんは説明した。

六、風雨の江の島で

八月××日、風雨の後、江の島行。

新橋より二等乗車、藤澤下車、電車にて片瀬まで。風雨の後とて、到る處、被害甚だし。

片瀬のゑびすや支店に少憩、江の島の橋落ちたれど、三十分前より通ずと聞き、安心す。お近の喜び一方ならず、「こんな所で、夫婦仲好く、一生暮したなら、何んなに嬉しいでせう」と云ひ、「もう歸らないわ」と云ひ、「死んでも宜いわよう」と、感動の状あり。ゑびす

屋に泊る。三階の八疊と六疊にて、四邊に他人の氣配せず、何の遠慮も入らず。褥を別にして睡りたれど、夢しばく破る……。

あ、此の夜、二人は終に夢幻より現實に入れり、空想より實際に入れり、計畫より實行に入れり。記憶すべき一夜、忘れ難き一夜、やがては思ひ出の一夜なるべきか。

朝七時半、眼覺む。江の島見物は、女にとりて、多少の驚異と趣味とをそゝりしが如し。晝餐後、寢そべりながら、今後の事に就て、女の同意を求む。予の第二の妻として、予の保護の下に生活せん事を勸むれど、儘ならぬ身の上なればとて、多くを語らず。予の心、大に平かならず、他に相許したりし男あるや如何に、最早、二人の間に、秘密のあるべき謂れなし。悲しみも、苦しみも、悶えも、煩

ひも、二人の上にくそと語り聞かす。果は「芝居茶屋の女をして居る方が、浮氣が出来て宜いのであらう」と、予又多く言はず。

果然、お近には大なる秘密潛みたりき。さめくと、春雨の如く泣き咽びつゝ、彼の女の自白せる處に據れば、お近には相許せし人ありしなり。新俳優×××の高弟たる岡村仙太郎が其の情夫たりしなり。人妻に非ず。妾に非ず、隠れて楽しむ情夫がありしなり。運命の神は、我等二人を風雨の江の島に旅せしめて、歡樂の一夜を授け、また忽ちにして苦痛の白日を與へたり。戀の甘酒汲み交したるも、思へば果敢き刹那の夢なりしよ。覺むれば、既に苦痛の谷底に墮されて、泣けども、叫べども、去りにし歡樂は歸らず。

余は初めて怒れり、女の誠心を疑へり、女の虚偽を憎めり。情人あ

る女と知らずして、戀心地の日頃を送れる余の妄を悲しむよりも、情人ある身の上を隠し蔽ひて、予の妄情に妄從せる女の大膽と無恥と厚顔とを憎み、且つ嘲り且つ罵りたり。女は唯、慟哭するのみ、許して下さい、と連呼するのみ。岡村の女なるに相違無けれど、その様なる心地は少しもせず。たゞ御身一人こそ、心の情人なれと咽ぶ。予の心、理智に明かなるが如くにして、感情に暗し。骨を刺すが如き運命の翻弄に對して、密に呪咀の感を深ふするのみ。

あゝ、弱き者よ、汝の名は單り女のみならず。惡縁、契深うして、容易に斷ち難いかな。

歡樂の江の島、苦痛の江の島、風雨の江の島。――

「日記はこれだけで終局になつて居るが、二人の仲はこんな事位で、

大詰になる様な平凡劇では無かつた。今、思ひ出しても身慄ひのする様な、大變な打出しになつたもんだもの、振つて居るよし。斯う云つて、富さんは一通の手紙を出した。

七、密通の罪にて候

「事件の結末が著いた時、大阪の友人へ送つた報告の手紙だが、これを読みさへすれば、何も彼も判つて了ふ。僕がくどくど話すよりも手ッ取早いから、先づ天ちゃんに讀んで貰はう。日記とは違つて、此の手紙の方は、稍名文なんだからね」

手紙は相應に長いが、要點だけを摘むのも面倒臭いから、全文を左に掲げやう。――

木村君、いろ／＼御心配を蒙つた一件も、どうやら無事に解決したから、何うか安心して下さい。江の島でそれと判つた時、綺麗に手を切つて了ひさへすれば、今度の様な面倒な事にもならなかつたのに、弱い女らしい多情の小生、飛んだ騒ぎを仕出かして恥しい。お近の情人が、板橋の魁座で芝居を演つて居た時にも、小生はお近と一所に板橋まで出掛けて、身の程知らずの嫉妬をしたりした。小生の方からは、逃げ様／＼としても、女の方から電話で呼出されたり、手紙の呼出しなどが来ると、宜い氣持になつて出掛けたものだ。自動車に乗つて大森の曙樓へ遊びに行つたり、妻子が實家の静岡へ行つた留守中には、小生の宅に連れて来て、下女を親許へ遊びに遣つて一晝夜も泊めたり、悪いと知りながら、男も女も斯う大

膽になれるものかと、果は自分で自分が恐ろしくなつたりした。一所に錦輝館の活動寫眞を見たり、一所にタキシードに乗つて、濱町の花長で天麩羅を食べたり、それが何うしてお近の情人に知れずに居やう。何でも小生の宅へ泊つた晩、男がお近に尾行して來たらしく、それから三日ほど過ぎた八月三十日附けて、お近の相許せし人岡村仙太郎から、一通の書留郵便が來た。

前略、私情婦近子と貴殿との近來の不倫の行爲は證據歴然、本人の自白等にて罪狀明白し、最早宥すべからざる密通の罪に候、是れが爲めに生ぜし私の不面目を如何に御所置被下候や、確答を得たく、御面語を強請申候、午前中ならば、私宅以外の場所にて面會仕るべく候間、右に對する御返答を待申候

此の状、今三十日御落手と見て、九月一日迄の消印の御返事なき時は非常手段に出申すべく候事を御承知被下度候 以上

××區××町××の地の××

大正三年八月三十日

笹村 富 夫 殿

岡村 仙 太 郎

豫て覺悟はして居ながら、此の手紙を見た時には、慚愧と懊惱と悔悟とに苛まれて、今更の様に小生自身の姿が、淺ましい畜生のやうに眺められた。斯うして明ら様に書いて寄來す以上は、お近も責め苛まれた結果隠すに隠されず、事實有の儘を白狀したに相違あるまい。この上は小生も、その情人に逢つて、欺らぬ心の儘を語つた上

で、思ふ存分の手段なり所置なり制裁なりを受けやうと決心して、早速返書を認めた。何時でもお目にかゝるから、お差支の無い時に何うか宅の方へ來て下さい、此方からも種々お話したい事がある、と簡短に書いて出した。

八、情味のある論判

木村君、小生が返書を差出した翌日の夕方、お近の内縁の情人たる岡村仙太郎は、大久保の小生の宅を訪れて來た。心からか、見れば顔色悄然として蒼ざめ、悲痛の色が漲り渡つて見えた。對座するこ

と少時、互に一語なく、默然として、相見るのみであつた。岡村の言葉は悲憤の調を帯びて、一語は一句よりも激越して、果は

熱い涙が兩頬に流れるのを見た。手紙に書いてある意味を敷衍して、お近の亂行を罵り怒ると共に、小生の無恥と不倫とを攻め立てた。法律上に妻と認定されるべき戸籍上の手続きは、都合あつて未了になつて居るが、お近が自分の未來の妻たる事實に二三は無。兎にも角にも、相應の媒介人を立て、正式に同棲した女に對して、斯る行為をされては、僕の體面も立たぬし、第一この心の苦痛を何う癒やすことが出來やうぞ、と、聲を慄はして、且つ憤り且つ訴へた。小生は心より事件の經過を陳べて、芝居茶屋の女としてこそ、思慕の情を寄せたれ、新俳優の情婦と知つて居たなら、何を好んで不義の戀を敢てしやう。たとへ戸籍上の正しい妻で無くても、君の情婦と知つての後も、依然として逢引を重ねて居たのは、自分の不覺であ

り、自分の汚行である。就いては如何なる制裁を與へられても、自分に於て更に寸毫の怨恨も無く、更に何の不服も無い。金で済む事なら金で済まして貰ひたいが、公沙汰にして他の手段に訴へると爲らば、それも致し方の無い成行である。何うか思ふ存分にして貰ひたい、自分も思ふ存分にされるのが、當然の成行だと信じて居る、と思ふ所を返答した。そして君の愛する女の爲めに、一人の若い男が、癒し難い戀の傷を負つて、人知れず悶え苦しんで居る事實に對しても、君は勝利者の態度を敢て取るか、と訴へて見た。俳優技藝學校を卒業したのみでなく、曾ては早稲田大學に學んで、哲學を研究した男だけあつて、岡村仙太郎は普通の俳優ではなかつた。強硬な態度で談判的に論じて居た彼も、小生の打明けた談話

と、心からの謝罪を聞くや、カラリと態度を一變して、君の負はれた戀の傷痕に對しては、僕も深く同情を表すると云つて、ハラ〜と落涙した。そして金も入らぬ、訴へもせぬ、唯この後、お近と逢引してくれさへせねば、他に何の要求も無く、他に何の欲する物も無い。要するに、お近が馬鹿ですと云つて、淋しく微笑むだ。お近の父なる人は、餘り性の好くない人らしく、其の後お近を連れて来て、千五百圓出すなら、お近を岡村から取戻して、お前さんの妾に差上げると云つて、小生を脅迫した。然し此方が強硬であつたのと、お近が泣いて諫めたのとで、父なる人も我を折つて、百十圓を與へると「今後貴殿へ對し、何等御無理ケ間敷き行爲は勿論、且つ御迷惑を及ぼすが如き事これ無く」の一札を小生に出して、何も

彼も落着した。何うか、安心して下さい、笑殺して下さい。過ぎ去つた今となつては、一場の悪夢であつても、小生にとつては貴い經驗の一つでした。——

九、虚榮心の強い女

「これで結末は着いた譯だが、岡村の方はなかく納まらないで、遂に髮斬騒ぎまでしたらしい。岡村が火の様に憤怒して、お近の髮を斬つた時、お近は悲しい様な、怨めしい様な、何とも云へぬ凄い表情をしたさうな。岡村自身も職業柄、いろいろの表情を研究もし實見もして来たが、お近の髮を斬つた刹那に見た表情ほど、人間の感情の複雑した凄い表現を見た事はない。河合武雄が巧いの、喜多村

縁郎が上手のと云つても、あんな表情は出来ませまいと、或る友人へ話して居たさうな。

富さんは語り終つて、ホツとした風になり、またシトロンを二三杯、一氣に飲んだ。

「その後、一度も逢ひませんか」

三さんが初めて斯う云ふと、天ちやんは、

「まさかねえ、そんな富さんでもあるまい」

と、熱い燗を立つやけに二三杯飲んだ。

「不如意の間に育てられて、小學校を卒業するかしない間に、芝居茶屋の女になつた女だもの、萬事が芝居的でねえ、表情など巧いものでしたよ。それに見よう見真似のパニチーが強くて、指環は欲しが

る、美しい衣は着たがる、自動車には乗りたがる、顔の綺麗な男には秋波を使ったがる。刹那々の物慾に満足する他には、何の希望も何の野心も無き女だけに、萬事が娼婦型の様でした。従つて妻として母としては、落第の方かも知れませんが、妾とか情婦とかにするには、理想的の女であつたかねえ」

富さんの思ひ出は、遠く江の島の邊に飛んで居るのか、但しは近い多摩川の其の月夜へでも、飛んで居さうな様子に見えた。

「何うだい姐さん、今の話に似て居る様な戀物語を、大抵の男は一つや二つ位づゝ有つて居るが、姐さん達にも澤山有らうねえ、彼所此所と數限りなく……」

天ちやん、少しく酔ひ初めて、擲揄ふと、

「お生憎様、折角ですけれど、一つも持合せが御座いませんわ。何時もく、もう聞かされたり、見せ付けられたり。妾達は斯うして、人様の花やかな舞臺に出ます、名も無い仕出し役者で、一生を終るのですわ。ねえ、お芳さん、つまらないわよ」
 年増は年増だけに、一寸、巧い事を云つた。

「だけれど、妾達、これからですわ。だましても、だまされても宜いから、同じ何するなら、死ぬる様な戀をしたいと思つてよ」
 若いのは若いだけに、若い事を云つた。

三人は此の夜を語り明し飲み明さうとて、更に熱い燗と鍋物とを命じた。多摩河畔の夜は次第に更けて、赤熱した三人の頭脳には、三人別様の思ひ出が、浮いて居る様な景色に見えた。歡樂もあらう、悲哀

もあらう、苦痛もあらう、追恨もあらう、懺悔もあらう。

「今度、市村座へ行つた時には、例のしる粉を食べながら、お近に似た女を見やうぢやないか」

と云つて、三人は大笑した。

今度は、三さんが「勝誇つた戀」を語るか、天ちやんが「捨てられた戀」を語るか、何れにしても、富さんは聴者の方に廻る順序である。――

修善寺浴泉記

松内冷洋氏に

(一)

冷洋兄、取るものも取敢ず、修善寺へ遣つて來ました。宿は河流の右に聳える養氣館。何の氣を養ふ積やら、自分で自分が判りませんが、出来る事なら十日餘も滞在して、何か大に振つたものを書きたいと思つて居ます。

昨日も今日も快晴、高濱虚子の命名した三層樓は「霞」の一角に納まつて、尾崎紅葉が「裸百貫の價見よ」と云つた菖蒲湯に浴びて居る

と、身も心も溶ける様で、此の半年の浪人生活の疲労が、一度に出た様な氣持がします。滞在客は極めて少く、二三百人から入る此の宿に、三十人ばかりの禿頭やら髯やら、丸髻やら庇髪やら、温泉宿の春は長閑なものです。

修禪寺の鐘樓が新に竣成したさうで、此の七八九の三日間は、鐘供養で賑うさうです。少しく誇張した申分かも知れませんが、巨巖奇石の間から湧く靈泉の中へ、十九貫七百匁の體軀を横へて、ジツと斯う瞑想して居ますと、東京の巷を徘徊して居た自分の姿が、様々な形になつて現はれます。近くは大阪へ遊んだ一週間の遭逢などが、遠い昔の繪巻物でも展開げた様に、強い酒肉の香を帯びて眺められます。

大阪では角座で、松竹の女優劇を見物し、南の富田屋の大廣間では、

その三四名様を拜見しました。本場の帝劇とは異つて、如何にも上方的色彩に富んだ藝風や、心易す氣な座敷の取なしを見て、種々な事を考へました。小野賢君が「女優拜見記」を書いてから、既に二三年を経居ますが、其の關西の女優達が、來月は大舉して上京するとか云つて居ます。帝劇の連中と比較されるだけに、彼の人達の仲間も、並大抵の苦勞ではありますまい。

大飛行が濟んだら總選舉、總選舉が濟んだら久能山の大法會、夫から秋の大嘗會と、豫定の行動だけでも、今年は相應に忙しさうですね。暫く新聞界を退いて、筆硯放浪を事として居た間にも、とかく新聞記者氣質が頭を上げて、たゞの新聞讀者に爲り得ないので困ります。青島行は當分延期しましたが、出来る事なら孤影漂然と北支那の一角

に立つて、その邊にウジヨ／＼して居る漂泊の男や流轉の女を題材にして、頗る大に振つたものを書きたいものです。

東京の新聞は三版や四版が、朝の八時を過ぎないと見られない程の温泉場ですが、それでも若い女達の間には、東京の風が吹いて居る様子です。これからまた一浴して、友人Sが半生の「戀物語」に朱筆でも加へませう。(三月三日朝)

(二)

冷洋兄、こゝへ來てから、今日でもう六日目になります。毎日清く澄んだ温泉に浴して、本を読んだり、原稿を書いたりして居ると、如何にも、ん氣さうに見えませうが、本人は頗る不安の状態にあつて、いろんな事を考へたり、悶えたりばかりして居ます。

五日の夜から、私の隣室に、青島から歸つた陸軍少將山梨半造閣下が泊られて、毎晩、按摩を取らせておいてになります。一度お訪ねして、青島のお話でも承はらうと思つて居ますが、折角、休養においてになつて居るのに、お邪魔をしては相濟まぬと思つて、まだ差控へて居ます。山梨少將閣下は、餘り訪問客をお喜びなさらぬさうで、午前中に一度散歩なさいまして、午後は佛様の御本ばかり、お読み遊ばしておいでになります。さうです。

六日の夜には、岩野泡鳴君、岩野清子女史の夫妻が、可愛い坊ちやんと肥つた女中を連れて、此の宿に泊られました。一箇月ほど滞在して、翻譯やら創作やらをするさうで、相變らず元氣旺盛なものです。久し振に一緒に温泉を浴びながら、大に文壇の近事を罵倒したり、新

聞界の傾向などを論じました。二人が餘り聲高く話し合ふので、同じ湯槽に入つて居た中年の女客は吃驚して、コソコソに上つてしまつたのは、ほんとに氣の毒に思ひました。

いよ／＼今日から三日間、修禪寺の鐘供養で、朝から鐘や太鼓の音が、ドンチャン／＼と賑かに聞えて居ます。泡鳴君と一所に、宿の襦袢姿で歩いて見ると、盛装した近郷近在の老若男女が、ゾロ／＼と狭い町に溢れて、宛然お祭禮の様な賑ひです。飴や駄菓子や果物や、玩具を賣る店がズラリと並んで、修禪寺の石段下には、大きな緑門が出来て居て、線香の煙が立つのぼつて居る様は、まさにこれ、修善寺稀に見るの盛觀と云つても宜いでせう。

空氣銃の店に入つて、泡鳴君と一所に二十錢だけ遣りましたが、二

人とも近眼ですのに、泡鳴君の十發五中に對して、私のは十發二中位の成績はありました。二人が一生懸命に狙つて居る傍へ、田舎の小學生徒が澤山集まつて、「やアい、髭の近眼、一發も中らないや」と笑ひ囃しました。その代り桂谷倶楽部の玉突では、百の對で突きましたが、三ゲームとも私の勝となつたので、岩野君は悄氣てしまひ、「今日は頭が痛い痛い」と云ひ出しました。

玉突臺は新井の別荘に三臺と、菊屋の別荘に一臺と、この桂谷倶楽部に一臺と、都合五臺ありますが、新井の三臺は冬季中は休業で、目下は菊屋と倶楽部とで突いて居るさうです。修善寺での好球家は旅館水月屋の主人、理髮床山口の主人が何れも百五十點で、他に十人ばかりは、何れも七八十點のところださうです。此の山間の温泉場にも、

東京の風は吹いて居るのか、理髮床などは、半西洋風の立派なのが、町の右側にハイカッて居ます。

今日は日曜ですし、鐘供養の當日ではあるし、朝から何もせず遊んでしまいました。夜は泡鳴君に招かれて、久し振に一杯やる積ですが、修善寺にも七八名は居ますと云ふ藝妓衆の顔は、不幸にして未だ拜見する暇がありません。(七日午後)

(三)

冷洋兄、昨夕から降り出した雨は、今朝になつても尙歇まず、温泉宿の春の雨ほど、わびしいものはありません。新聞は日々を初め、國民、朝日、時事、讀賣を購讀して居ますが、この四五日間の出来事は、海軍飛行機の墜落と大隈總理大臣の蓄音機吹込とが、何と云ふ事

なしに、頭腦に沁み込みました。

この宿の女中達は、みんな妙齡ですけれど、行儀作法も好い方で、普通の温泉宿に見る様な、みだらがましい事がないのは、何よりだと思つて居ます。着いた翌夜、熱いところを少々きこし召し過ぎて、翌日は甚く頭が痛んだ爲め、それ以來、芳醇なものにも御不沙汰をして居ますが、何だか淋しくて仕様がありません。

昨夜は岩野泡鳴君の座敷で、清子夫人のお酌で、一合餘り頂きましたが、宿の御馳走よりは、蟹の罐詰や、焼いためざしなどの方が、何んなに美味かつたでせう。衣食住とも、平素から簡易にして、安價な生活を送つて居る私には、鯛のぎよでんや、うま煮などよりも、かうした物の方が、相應して居る様です。

旅から旅を歩く早川白洲とか云ふ浪花節が、一軒しかない寄席にかゝつて居ますが、強て聞くほどの興味も起りません。宿の女中達は、私が餘りに引籠つて、原稿ばかり書いて居るので、「時々は御散歩でもなさいまし」と勸めてくれますが、何だか思ふことのみ繁くして、果は涙催す様な氣持になるので閉口して居ます。

拙著二三冊と、青柳有美氏から贈られた「女の話」と「河竹默阿彌」を持つて来て居ますが、「女の話」の皮肉なページを拾ひ讀みしたのみで、未だ落着いて默阿彌翁に見參することも出来ません。時には大きな聲でも出して、詩吟か浪花節でも唸りたい様な、焦燥した氣持になりませんが、隣室はそれ、山梨少將閣下ですからね。

修禪寺も、露店商人も、今日の八日を書き入れにして居ましたのに、

生憎の雨はほんとに氣の毒です。それでも東京や近縣から、何々講の團體が三十人、五十人と、昨夜から繰込んで来ました。雨が霽たら新たに出来た鐘撞堂へ行つて、供養のお賽錢でも上げ様と思つて居ますが、この分では今日も終日、泣く様な雨が續きませう。

序に申し上げますが、宿の若い女中が一人、能く「東京日々」を借に來ますので、何を讀むのかと思つて居ましたが、今朝給仕に來た女中さんの話に據りますと、それは幽芳先生の「小ゆき」を引張り合つて愛讀して居るのでした。——どれ、私もこれから温泉に入つて、私に情なかつた女の面影でも呪つて遣りませうよ。(三月八日朝)

(四)

冷洋兄、昨日は午後から晴れても、まだ黒い雲が立迷うて居ました

が、今日は日本晴の好天気で、何だか気分が爽快になりました。こゝへ来て以来、ホンのちよつぱり飲んだのみで、まだ大にへられけませんが、東京へ歸るまでには、一度發展したいものだと思つて居ます。今日は泡鳴君と一緒に、此の界限を歩いて見ましたが、いやもう凡山凡水で、繪にも詩にも爲つたものではありません。たゞ季候が東京よりも温暖で、紅梅白梅の満開して居る風情だけは、得難い景趣だと思ひました。名所では範頼の墓があり、修禪寺があり、櫻ヶ丘公園があつても、それが私達の興味をそゝる程の新しい價があらうとは、何うしても思はれません。

鐘供養の最終日と云ふので、今日は團體が大分入込んで、何の宿も俄に賑しくなりました。騒々しいどよめきの中にも、修禪寺の鐘は般

々として、民衆の胸に響けよとばかり、信仰の道を傳へて居ます。いろんな露店の中でも、東京で見られないのは、わさび漬や佃煮を賣る店で、肉桂の太木を賣つて居る店は、端なくも私等が少年時代の田舎を想ひ起させました。

僅に十日ばかり、東京に背いて居ますのに、もう銀座界限が懐しくなりました。そのくせ、東京へ歸つてしまへば、斯うして暮して居る修善寺の朝な夕なを、思ひ出に浮かべて、も少し滞在して居れば宜かつたに……と思ふかも知れませんが、當面の仕事さへ片附けてしまへば、一日も早く飛んで歸つて、何はなくとも灘の生一本で、屈託の無い酔を購ひたいものです。

今夜は養氣館の演藝場で、番頭連中を初め、土地の天狗連や、滞在

客中の有志などが集まつて、素人義太夫大會を開くさうです。定めて大に聴くに足るべきでせうが、私は一人この室に閉籠つて、萬年筆を走らせながら、近松や出雲に共通した「友人の戀物語」でも書きませう。相の手は三絃でなくても、窓の外には桂川が、二六時中無韻の音を立て、流れて居ます。

九年振に此宿の主人と逢つて、夜更くるまで種々の雑談を致しました。温泉宿の主人と云つても、養氣館の相原君は、文學、繪畫、演劇に深い趣味を有ち、斯道の大家達とも交際が淺からぬさうで、近頃は専ら南畫を研究して居るとの事です。數多い作品の中には、優に専門畫家の墨を摩す物があるとの評判ですが、私は未だ「拜見」の光榮を得ません。

殊に相原君が、吉右衛門の益友として、最良としての「吉右衛門觀」には、大に傾聴に價するものがありました。また尾上菊五郎と三遊亭圓朝と河竹默阿彌とを論じて、この三人者の間には、藝術家としても天才としても、何處かに共通して居る點がありますと斷じた言葉には、大に敬服しました。温泉宿の主人でも、こゝのはそんじよそこらのは少しばかり違ふ様です。

十時半、温泉に浴して居ます處へ、岩野泡鳴君が遣つて来て、「素人義太夫を聞いて居たが、中に一人上手なのがあつたよ」と感服して居ました。川向ふの何とか云ふ料理屋には、お大盡客でも有ると見えて、三味や太鼓の音が陽氣に聞えて居ますのに、私は今夜も亦獨り寢の冷たい夢を見ねばなりません。(三月九日夜)

(五)

冷洋兄、今夜東京から来る筈であつた、SとMの二人は来なくて、伊東に居る國木田北斗君から、「アヌクマテ」と云ふ電報が来ました。そして六七里先の伊東の暖香園から、電話で私を呼出して、「頭がクシヤしくたから来た、明日行くから、久し振に一杯やらう」と、元氣らしく云ふのです。

東京、横濱、静岡、沼津の團體參詣者は、今夜限りだと云ふので、何の宿屋も大分賑つて居ます。川向ふの料理屋では、宵の間から三味や太鼓で、や、こらくくと云ふ大騒ぎで、男の濁つた怒鳴り聲や、女の甲高い唄聲が、桂川の流れを越えて聞えます。かうした伊豆の温泉場にも、温泉場に相應しい戀の悲喜劇が、若い人達の間、人知れず

繰返されて居ることせう。

養氣館の演藝場では、今夜も素人義太夫大會有るさうで、泡鳴君夫妻を初め、滞在客二百人ばかりで、頗る賑つて居るさうですが、私は何だか義太夫なんか聴いて居られない様な氣持がして、今夜も獨り淋しく、萬年筆を走らせて居ます。今恰度「肺病で死んだ妓」と「銀座の評判娘」と「草津温泉の夢」の三篇を脱稿して、之れから「謎の伯爵夫人」を書かうとして居るところです。

これは皆友人S君の戀物語なんですが、「倫敦の思ひ出」と「平野丸の甲板」の二篇さへ書いてしまへば、東京へ歸れるだらうと楽しんで居ます。夫婦連か、然らずんば相思の情人と共に、來り浴して楽しむべき温泉場へ、孤影悄然として遣つて來て、淋しい思ひを抱きながら、

友人の戀物語を書かねばならぬとは、何と云ふ不幸な廻り合せでせう。獨身者の方が、のん気で宜いことも有りますが、こんな時には、しみじみと「孤獨の悲哀」とやらを感ぜずには居られません。

理想選舉や模範選舉が、だん／＼近づいて來るので、編輯局は目の廻るほど忙しいこととせう。修善寺は今日も日本晴の好天氣で、素肌すはだに浴衣を着て、薄うすい襦じゆ衣いを重ねて居ても、私などは少し歩くと汗あせびつしよりになります。東京ならば、櫻花が散つた頃の季候で、木の芽田樂きぬめだんがくを思ふ頃ころでせうが、こゝでは名物の生椎茸なましひたけと蜜柑みかんが美和みわいぐらゐるもので、他には別に美味い物ものがありません。

明日は北斗君や泡鳴君と一所いしょに、談論風發だんろんふうはつの愉快ゆかいを盡つくさうと思つて居ゐます。(三月十日夜)

(六)

昨日は伊東から國木田北斗君が來て、泡鳴君と三人落合にんおちあつて、久しぶりに清興せいきようを盡つくしました。玉突たまつきやら空氣銃くうきじゆうやら吹矢ふきややら、まるで子供こどもの様な氣持きもちになつて、桂川かつがはのほとりを散歩さんぽしました。鐘供養かねくやうの團體客だんたいきゃくは次第しだいに散さんじて、さしも賑にぎしかつた修善寺しゆぜんじの町まちも、今いまや全く前まへの静しづけさに復かへりました。

養氣館やうきかんの川向かはむかうに在ある開春亭かいしゆんていに登のぼつて、初めて土地とちの藝妓衆げいしやしゆうなるものを拜見はいけんしました。泡鳴君はうめいくんが七八年前ねんぜんに、遊あそんだことのある家いへださうですが、北斗君ほくとくんや私は初見參うひけんざんであるだけに、一種しゆの興味きょうみがありました。土地とち第一だいいちだと云ふ久松姉ひさまつねえさんは、漸あまく色香いろかの衰おとろへを見る中年ちゆうねん増まで、如何いかにも淪落りんらくの影かげが添そうて居ゐました。反かへつて若い一駒いっこまと云ふ妓この方はうに、

幸福らしい微笑が漾つて居るのを眺めました。

國木田君の酒は、その量に於ても、その持久力に於ても。私等の先輩でしたが、近頃はとんと召し上らぬさうで、晩飯は二人で二合が適度の酔加減でした。泡鳴君に四目か五目の一勝一敗と云ふ恭も、私には何の興味を惹きませんが、新聞界や文學上の談話には大分氣乗がしました。新思想家の立候補を難じた相馬御風君が、こゝでも話題の一つになりました。

國木田君は、「修善寺と云ふ所は、讃岐の金刀比羅へ行つた様な氣持のする所だね」の一語を残して、たつた今、東京へ歸りました。私も東京を出てから十二日、三人の子供や、銀座の燈火が戀しくなりましてたけれど、未だ二三日は滞在して、至愚至劣なる新著述を完成したい

と思ひます。そして日支問題が無事であつたら、櫻の花が咲く頃に、一度、青島まで行つて見ませう。

冷洋兄、つまらぬ内事ばかり申上げましたが、私の此の通信も、これでおしまいと云ふ事にいたしましたせう。東京へ歸つたら、何は無くとも芳醇なので一杯やりながら、この日頃の悶えを遣りたい——これが差當つての私の今の樂みです。(十二日正午)

(七)

冷洋兄、私の通信は、前回でもう完結しましたけれど、今日は是非とも申上げねばならぬ大珍事が出来ました。それは伊豆國の温泉湧く里、この修善寺には珍らしい雪が降つて、満目白皚々、如何にも美しい銀世界の壯觀を呈したことです。

曉の五時頃には、浮かれ男に捨てられた年増女が、さめくくと泣いて居る様な、咽び音の雨でしたが、それが正午前から寒になつて、午後二時頃には霏々として、いよ／＼本物の雪になつて了ひました。窓を開けて眺めて居る間に、四邊の山々が白粉の様に色彩られて行く景色は、何うしても四疊半の小鍋立、好きな人と差向ひの熱いので、ちりか湯豆腐と云ふ處でせう。

團體客の去つた後の温泉宿は、伽藍の様にガランとして、たい長い間の滞在客が三々伍々、菖蒲湯に浴して居る様は、如何にも温泉場の様な気分がします。そして十日餘りも此宿に居て、何か知らぬ心地で居たのに、今日の雪でスツカリ嬉しくなつてしまひ、初めて修善寺へ来た甲斐があつた様な、衷心からの悦樂と快感とを覺えました。今

夜は定めて飯が美味いこととせう。

この温泉宿生活も、愈々明日限りとなりました。東京へ歸れば、また依然たる浪人生活で、悪戦苦闘するのかと思ふと、何だか厭になつてしまひます。折角、修善寺へ来て居ながら、範頼さんにも見合せず、梅ヶ香匂ふ公園へも背いて、このまゝ東京へ歸るのかと思ふと、さすがに名残が惜まれます。今度は何時頃、何んなになつて來ることやら、前山後嶺たい雲漠々……。

私の様な賑やかな、騒々しい、常にはしゃいでのみ居る男も、こゝでは何時も静かに沈んで、大きな聲一つせずに、十日餘を過してしまひました。東京へ歸つて久し振に子供達の顔を見たり、電車に乗つたりすれば、また前の頓興な男に復ることとせう。私の様な性質の男は、

静かな温泉場などにジツとして居るよりは、常に都會の烈しい刺戟を受けて居ねば、何事も出来ずまい。

泡鳴君は昨日から翻譯を始めましたが、この雪では一二合飲める、今夜あたりはどうだ」との勧誘がありました。今夜はこゝでの飲み納めなり、別れの盃なりにして、天氣が好かつたら十四日、悪かつたら十五日には、必ず歸京したいと思ひます。

この通信を終るに際して、私は修善寺の人達の上に、祝福多からんことを願ふと共に、遙に兄の筆觀、益々雄健ならん事を祈ります。——左様なら、左様なら——(三月十三日午後)

青柳有美氏に

青柳有美先生足下

修善寺の温泉から歸つて、二十餘日の月日は、流星の如くに過ぎて了つて、日常生活の煩累から脱れ、心静に述作に従事し様として計畫は、痛快に裏切られてしまひました。新著「青い酒と赤い戀」は、何うやら此うやら完成しましたが、此の日頃、心に負ふた一種の創痕は、今も尙、これを癒すことが出来ず、苦しみ悶える様な月日を送つて居ます。そして、右の腕には「生活の不安」を抱いて居ながら、左の手に「戀の甘酒」を汲まうとして居るのが、修善寺から歸つて後の私の全生活です。苦しい遣る瀬ない悲しい痛ましい状態は、これをローマンスとして物語るには、餘りに生血が滴る程の新事件であることを、私は殊に深く苦勞に思つて居ます。何時になつたら現在の斯うした心

持と事實とを、過去の思ひ出として眺めることが出来ますやら、一場のローマンスとして、世間に公にすることが出来ますやら。今の私は、たゞ

■月日の隔り行くを

一向専念に祈つて居るばかりです。妻を亡つて一年有半、新聞社を退いて半歳、内に萌す淋しい思と、外から迫られる遣る瀬ない心とは、「孤獨の悲哀」を生み、「生活の不安」を醸して居ながら、私の「第三の心」は、或るものを要求して今日に及びました。その或るものが何であるかは、私自身にも明かに識別することが出来ないで、物狂はしい月日を送つて居た間に、第一の姿となつて現れたのが「戀の甘酒」でありました。妻が壯健で居たり、新聞社で活動して居たりした時代に

は、容易に経験したことの無い戀心地が、或る女を對照として、猛然として心の隅に萌しました。中學一年生と尋常三年生と幼稚園兒と、三人の男子の父であることや、三十八歳の中年の男であることは、斯うした場合にも何の力ある「コンモンセンス」になりませんでした。「馬鹿な事を云ふ男だ」と嘲り笑はれるのが、世間の常でせうけれども、私は

■中年の男の戀心地

と云ふことを、今度初めてしみぐと味はふことが出来たのを、不幸では無いと思つて居ます。其の女が何處の何人であり、何うした機会に、何うしてこんな戀心地に陥つたか、それは暫くの間、不問に附して居て下さい。私はたゞ、妻を失つた中年の男が、常に生活の不安

と苦しい挑み合をしながら、其の一方では「戀の舞臺」に登場するだけの餘裕があることを「痛ましい滑稽」であると眺めます。それが喜劇に終るにせよ、悲劇の大團圓となるにせよ、そんな事には一切頓着せず、二十歳時代の男に似た若い心を以て「戀の囚人」となつて居ることを「面白い悲惨」であると眺めます。そして妻が壯健で居た時代には、家を外にして浮氣三昧の月日を送つて居た男が、妻を失つてから或る時間を経過しますと、反つて眞面目な心になつて、今までの様な浮氣心では、女を見ることが出来なくなるものだと云ふことを、痛切に合點し、

■痛切に自覺する事

が出来ました。従つて中年にして獨身になつた男は、周囲の事情や

ら自分自身の決心やらで「女」と云ふものを「日常生活」の外に置いて、何の交渉も有たずに居ても、何時如何なる場合に「女の囚人」になつてしまふか判らない危険性を持つて居る、と云ふ事をしみじみ知ることが出来ました。況して私の様に戀を戀することの激しい男には、たとひそれが遊戯的にせよ、常に「戀」と云ふ豫感が意識の何處やらに潜在して居ますから、或る機會に遭逢すれば、さながら火に油を注いだ如くに、時と所とを選ばずに爆發してしまふのだと云ふことも、初めて明かに合點することが出来ました。中年の戀には理智のひらめきがあつて、若い時代の様に全然没頭することが出来ないだけ、それだけ遊戯的でなく、詩歌的でなく、繪畫的でなく、音樂的でなく、常に實生活の陰影が色濃く映つてゐることも、能く知ることが出来ま

した。従つて、

■中年の戀は米の飯

であり、澤庵漬であり、味噌であり、醤油であり、鹽であつて、少くとも私が今、経験して居る「戀愛状態」は、生々しい私の生活そのものであることを、明かに了解することが出来ました。何ものかを求めて休まない淋しい心の一隅に、孤獨の哀しさを打壊る様な戀の芽生を感じた時、その全努力を「戀の完成」に注ぐのは、敢て怪しむべき事ではありますまい。私が其の女と相知り、相許すに至つたのは、僅に一ヶ月前のことですが、私はその女のためには、私の妻になりたいとて、此の一年間手紙を送つて居た、未見の一婦人をも捨てしまひました。私の全部を了解してくれる點では、今の女よりも未見の婦人の

方が、幾倍であつたか知れませんが、私は何の顧慮する處なく、手紙だけで知合になつた未見の婦人を捨て、新しく相許すに至つた女のために、生涯曾て経験したことのない戀心地を味はふ様になりました。若し夫れ、

■生涯の幸福と不幸

とに至つては、未見の婦人と相許し合ふ方が、或は幸福である様な氣持がしても、既に私の戀愛状態は、そんな問題を超越して、理智の境より感情の分野に入つてしまひました。その女は今、病で淋しい床に臥つて居ますが、私は東京から汽車で四五時間の遠きを厭はず、一泊がけて看病に行つたり、また毎日の様に手紙を送つたりして、僅に切ない戀心地を慰めて居ます。そして妻を失つて一年有半の後、さ

うした女に戀心地の今日此頃を、他人の妻に眺めて嘲つたり、憫んだりしながら、一方では依然として戀心地の中に没頭して居ます。娶つて妻にしやうと云ふ、漠とした決心はあつても、その女の妻としての資格に立入つて、詮議がましいことをする氣持にはなれず、たゞ戀心地そのものに心酔して居る自分を、愚であると罵る一面には、「しかたのない成行だ」と云ふ様な、其の場限りの申譯の理窟を發見して、自分で、

■自分の物狂はしい

今日此頃に、強て安定の氣休めを見付け様として居ます。生活の不安に何か知ら一種の壓迫を感じて居ながら、他の一面に於て斯うした戀愛状態を味はつて居るのを、「のん氣な男だ」の一語で貶し去られる

には、餘りに眞面目な「勞働的の戀」であり、餘りに本眞劍な「生活的の戀」であることを、心苦しくも感じて居ます。さうして妻の死んだ當時は、哀別に伴ふ一種の反感として、「結句、獨身はのん氣で宜い」と思つて居たことも、實は意識しない痛烈な哀感であつたことが、此の頃に至つて漸く判りました。妻以外の女に遊戯的の戀をして、一緒に花見をして楽しむことも出来ない自分自身の姿が、何か知ら切迫詰つて居たことをも、考へずには居られなくなりました。戀愛即ち生活、生活即ち戀愛の苦しい遣る瀬ない味は、中年にして獨身になつた男にのみ投げ與へられた「戀の甘酒」であると思ふ時、今やその一滴を汲んで、人知れず

■醉心地にならうと

して居る私の姿が、憐れにも氣の毒にも眺められます。そして私の斯うした戀愛状態が、一場の悪夢に終つてしまふか、徒に思ひ出の微笑になつてしまふか、或は花を開き實を結んで、私の生活日記を彩どる様になるか、今は何も彼も「途中」にあるのです。計畫と豫期とが意表の外に出るのは、多くの「戀の歴史」が教へてくれた二千年來の事實ですが、私の生活味ある戀の甘酒も、これを悉く汲み終はるまでは、容易に豫言者めいたことは云はれません。——私が何時、何處で、その女と相知り、相許すに至つたかは、それは後日のローマンズとして、暫く不問に附して下さい。私はたゞ毎日、その女の病床に宛て、長い手紙を書いて送りながら、今日この頃を暮すより他には、何の仕事もない身の上であることを、恥辱と思ふほどのコンモン

センスなら、有つても無くても宜いと斷言するだけの勇氣一つを有つて居ますから。——(四月八日夜)

澁川玄耳氏に

▲澁川さん、私が修善寺で書いた「酔ぎめの悲哀」と云ふ通信は、尻切トンボの儘で、この書の巻頭に入れました。あれから後の事を少し申し上げねば、何だか結末が着かない様ですが、實は何も彼も未解決の儘で、今日に及んで居るのです。東京日々へ入社的一件も、青島へ行く筈の事も、實は變テコになつてしまひました。そして三月十七日の朝、修善寺を發つて、私は東京へ歸つて來たのです。

▲友人の戀物語を書くために、わざと修善寺へ行つた私は、私自

身が何時の間にか戀物語の中に登場して、今日まで苦しみ悶えて來ました。「三十八歳にもなつて、三人の子があるのに、何と云ふ馬鹿氣なことだ」など、お嘲笑になつては困ります。私の様な浮氣者にも、一生に二度の「戀する時」が來たことを、運命の神の惡戯など、云つて、頭から冷笑熱罵されることも、御免を蒙りませう。

▲今は何事も進行中ですから、詳しいことは事實の經過で、御承知を願ひませう。この上は生活の根柢を確定して、大活動を始めたいと思つて居ますが、何だか心身が疲労困憊して、文章を書く氣持にもありません。浪人生活半歳の惰氣が、深く心身に喰入つてだらけてしまひ、容易に緊張した氣持を起させないのでせう。これではいけない、これではいけない、これではほんとにいけない。

▲また厭な戦争が初つて、日本と支那の間に、屍の山を築き、血の河を漲らせることだと思つて居ましたが、何うやら事無きを得たのは、眞に結構な事に存じます。私の苦しい戀愛生活も、日支問題の火の手が上つた三月上旬に初まつて、最後通牒の五月上旬に漸く一段落を告げました。そして哀別離苦の悲劇に終らず、一時の挿話から永久の小説に爲り得たことを、衷心から欣快として居ます。

▲「君、もう後妻なんか貰ふなよ、男は獨身の方が氣樂で好いよ」など、貴下は能く口癖の様に云つて居られました。私に到底、獨身では生活し得ない類の男なのです。それでも親戚縁者からあつた二三の縁談を斥けて、今日までは何うやら此うやら暮して來ましたが、今度この度は左様はいかなくなりました。従つて私の空想的戀愛生活は、

いよ／＼現實的の戀愛生活に、一步を進めました。

▲櫻花の三月から若葉の五月まで、この三ヶ月の月日は、私の内的生活に様々の動搖を見た時でした。佐々木商店の廣告部の方は、其の部の閉鎖と共に退いて、生計上の保證を失ひましたが、私は別に周章も狼狽もせず、極めて大膽に落ち着き拂つて、戀愛生活の渦中に没頭しました。日支問題の結局が何う變化しやうと、世界の大局が何う進展しやうと、そんな事は私の大問題では無かつたのです。

▲「戀と名と金を欲する此の心、騙れる心、狂へる心——」と云ふのが、私の拙い生活の歌にあります。私は先づ戀を得て、前半生の遊蕩的生活を打切つてしまひ、それから名も得たい、金も得たいと慾張つて居ます。觀ずれば戀も名も金も、果敢きこと浮雲に似たりなど、

悟りすましては居られせんもの。生を此の世に享けた以上は、能ふだけの慾望に、満足して樂しみたいと思つて居ます。

▲この書は「青い酒と赤い戀」と題しましたが、内容は悉く友人Sのローマンスに終始して、私とは全然、没交渉の事はかりです。けれども、此の物語に薄紙一枚隔てた背景には、私の生々しい戀愛生活の一部が、隨所に彩られて居る様な氣持がします。何の關心も無く他人の戀物語を書いて居ながら、男女の心持を敘する條になりますと、何時の間にか松崎天民の個性が、飛出したりして居ます。

▲斷じて小説を書かないと威張つて居ながら、私は何時しか小説家の糟粕を嘗めて居たことに、我ながら腑甲斐ないと思ひました。「青い酒と赤い戀」一卷は、事實を有の儘に記述した或る男の半生の記録で

あるべき筈が、何時の間にか小説になつてしまつたのです。私はたゞ此の小説的記述の背景に、生々しい私の戀愛生活が、陰影となつて居る一事だけを、強て自ら満足とし慰藉とさせよう。

▲青島へ行つて、久し振りにお目に掛る筈でしたに、突然貴下が上京されましたので、こんな嬉しいことは有りませんでした。國民新聞の渡邊君や、朝日新聞の薄井君など、共に、種々の方面へお伴したのみで、お宿の方へもお伺いたさず、失禮ばかりしました。昨日、四五日の旅から歸つて聞きましたら、既に青島へお歸りになつたのとて、重ね々失禮しましたのが、残念で々なりません。

▲私は此の後、何う云ふ風にして、新生活に入りますか、實は自分で自分の前途が判らない様な、極めて不安な状態の中に、様々の事

を思ひめぐらして居ます。浪人生活半歳の間に、唯一つの收穫として自ら慰め得るものは、苦い戀愛生活の経験だけでしたが、私が將來の悪戦苦闘も、思ふに此の戀愛苦の上に、新しい出發點を刻み付けねばなりません。兎に角、何うにかして進んで行きませう。

▲若し夫れ、この三ヶ月間の戀愛苦の告白に至つては、これを他日の新著述に依つて、世に見参いたさせよう。今は尙、その渦中に在つていろ／＼思ひ悩んで居る際ですもの、これを物語として公にするには、餘りに生血が滴る程の胸苦しさを覺えます。戀も、悩みも、苦しみも、歡びも、悲しみも、月日を隔て、過ぎ來し方に眺める時、初めて詩となり、小説となり、物語となり得るのでせう。

▲澁川さん、さらば、青島の天地で、壯健に御健闘なさいませ。私は

戀い赤と酒い青

新しきものを得て、新しい氣持になつて、新しい生活の序幕を開けて、
新しい奮闘の生涯に入りませう。生れてこゝに三十八歳、すべての古
きものを葬り去つて、私は新しく出なほすのです。この書は其の意味
に於て、私の内的生活に、一轉機を劃するものとも云へませう。さら
ば、壯健に、幸多き月日を過させ給へ。——（大正四年五月十四日）

青い酒と赤い戀終

大正四年六月一日印刷
大正四年六月五日發行

▲青い酒と赤い戀▼
〔正價金九拾錢〕

著者 松崎市郎

發行者 磯部辰次郎

印刷者 中野鍊太郎

印刷所 東洋印刷株式會社



發行所

磯部甲陽堂

振替東京壘五〇五六番

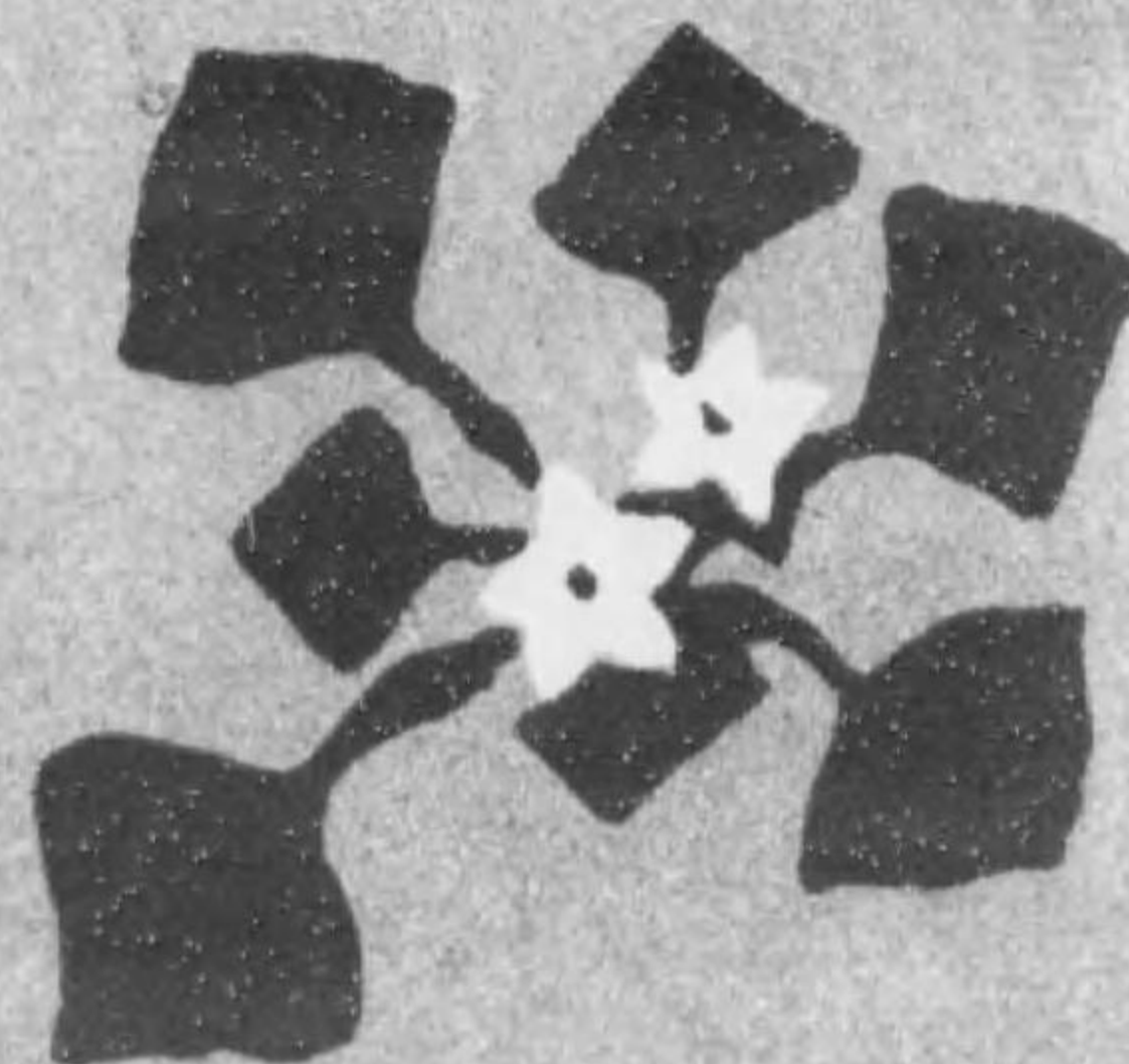
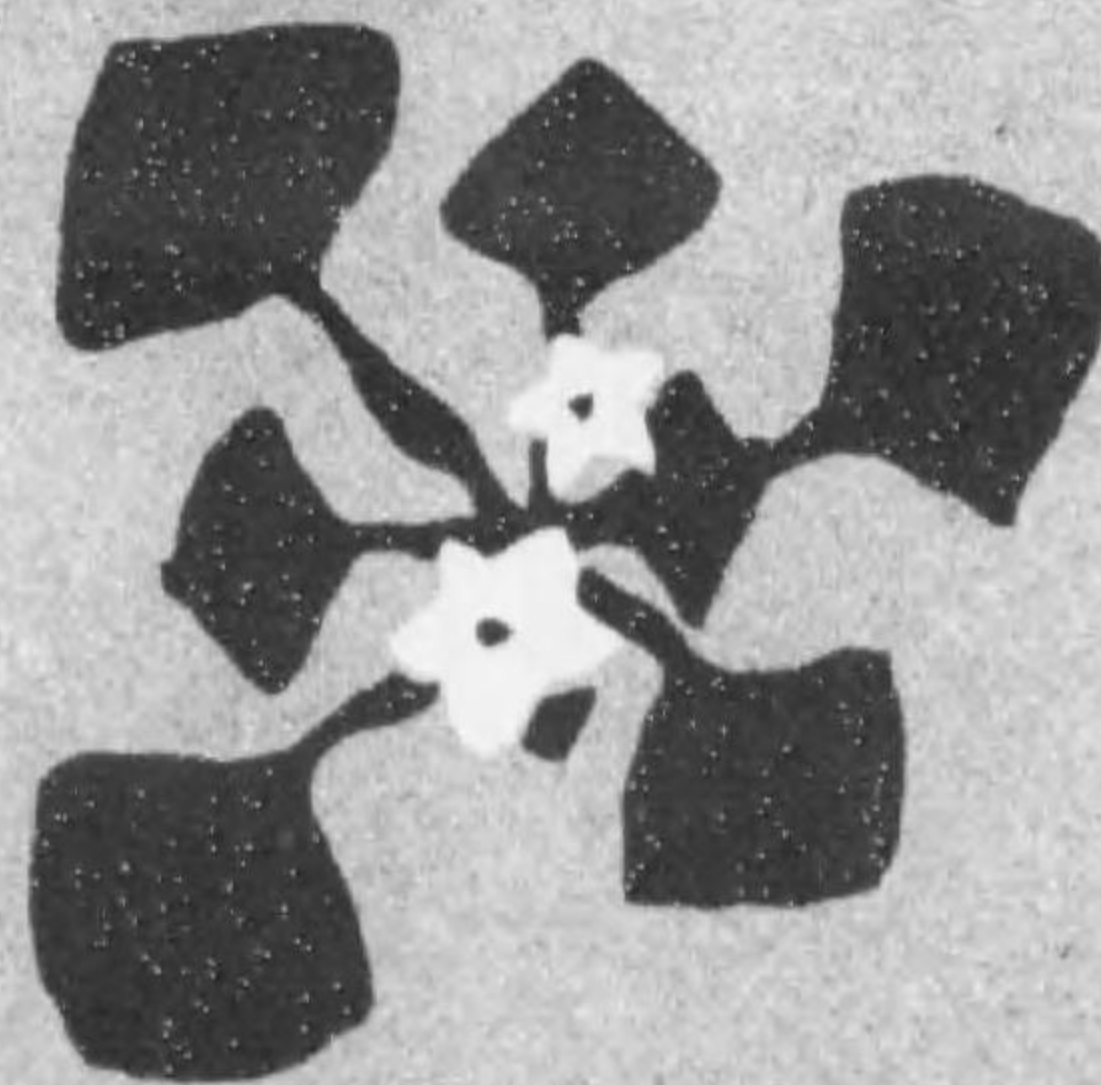
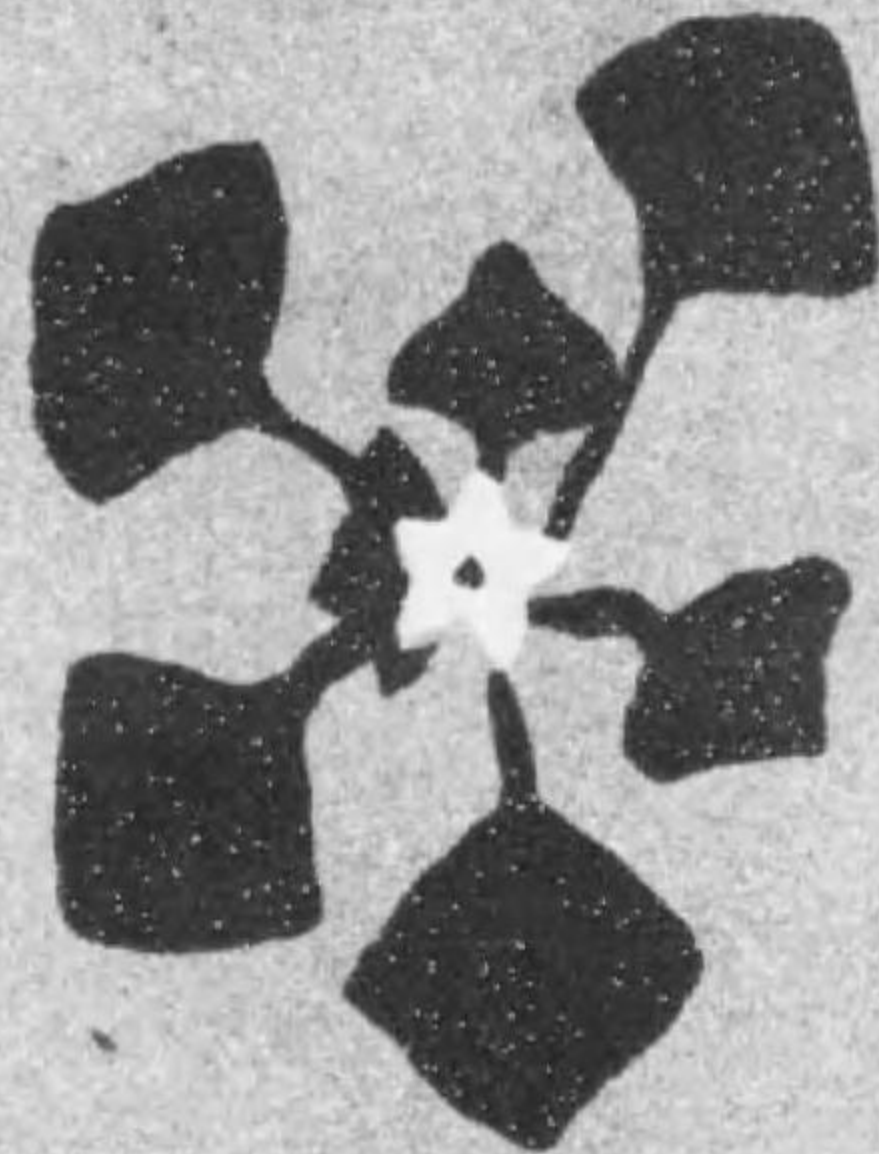
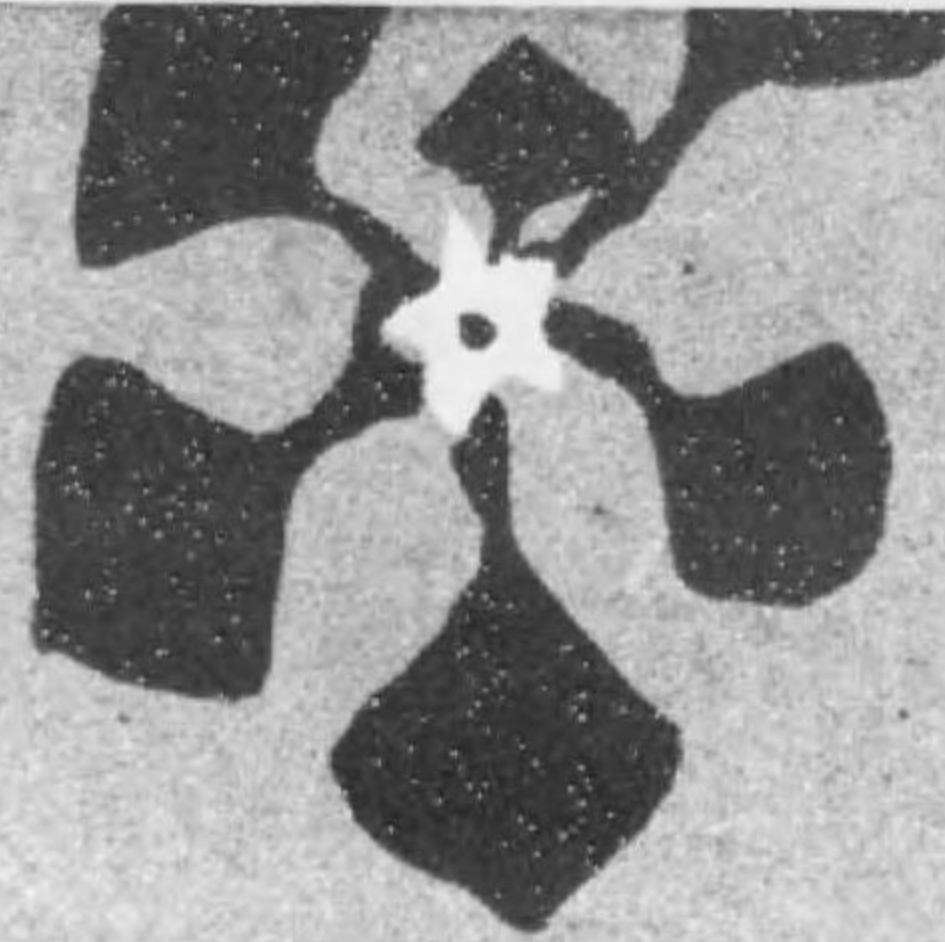
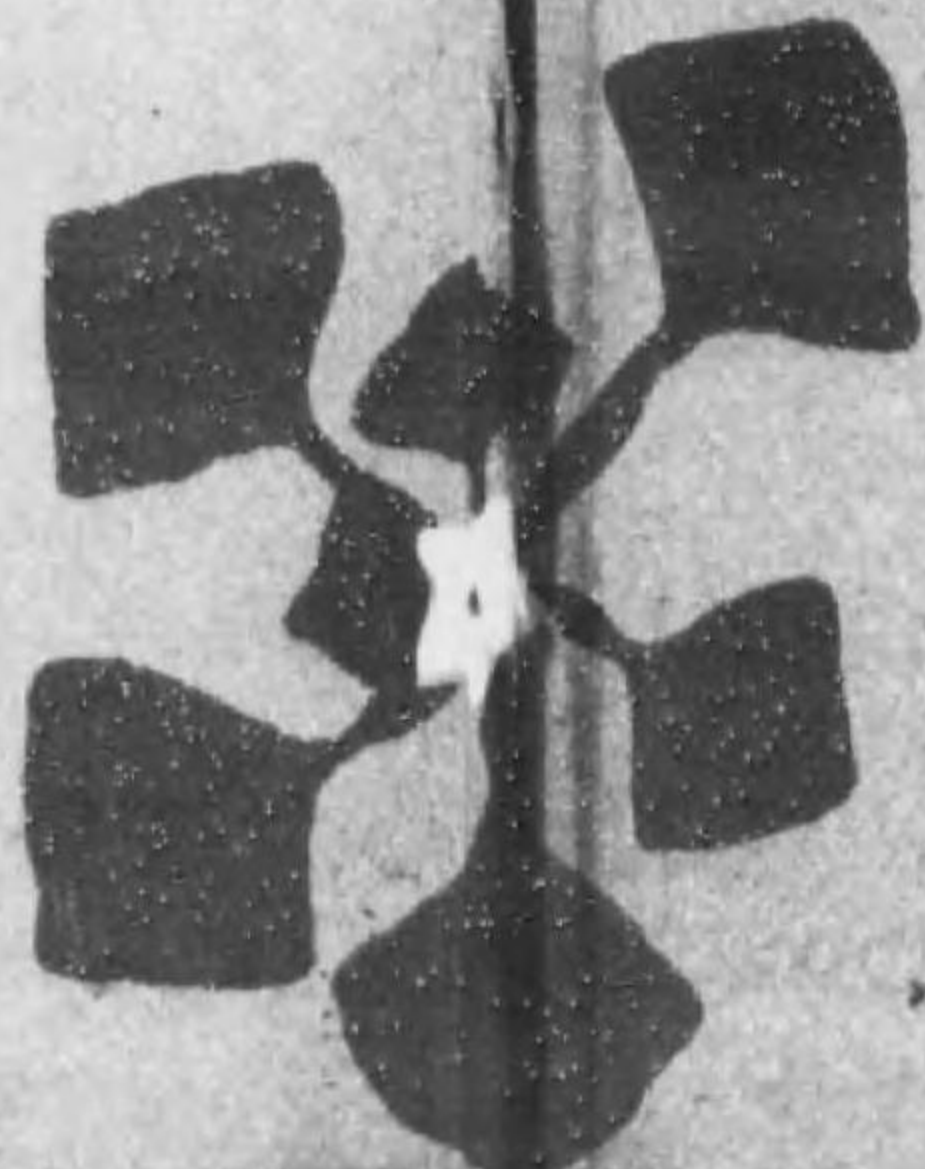
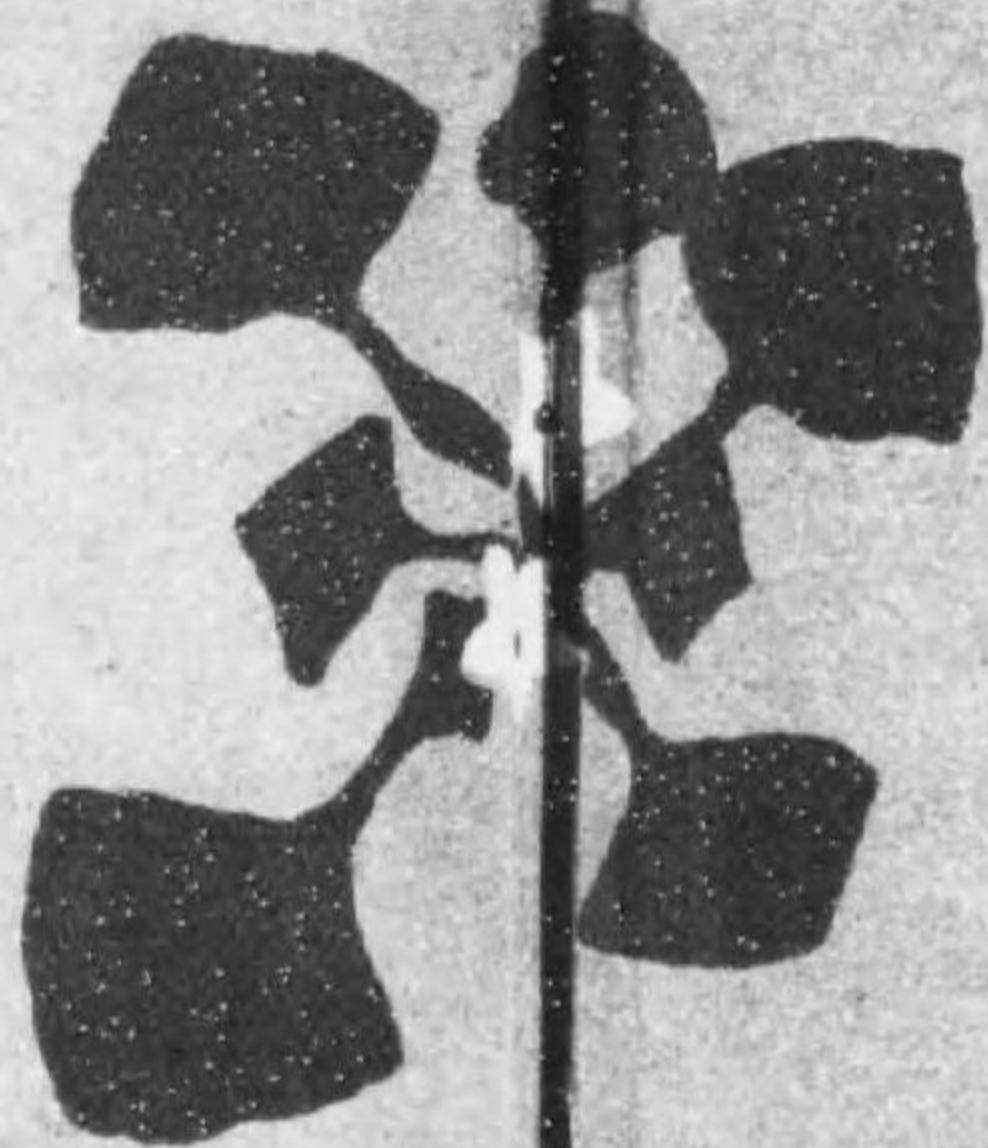
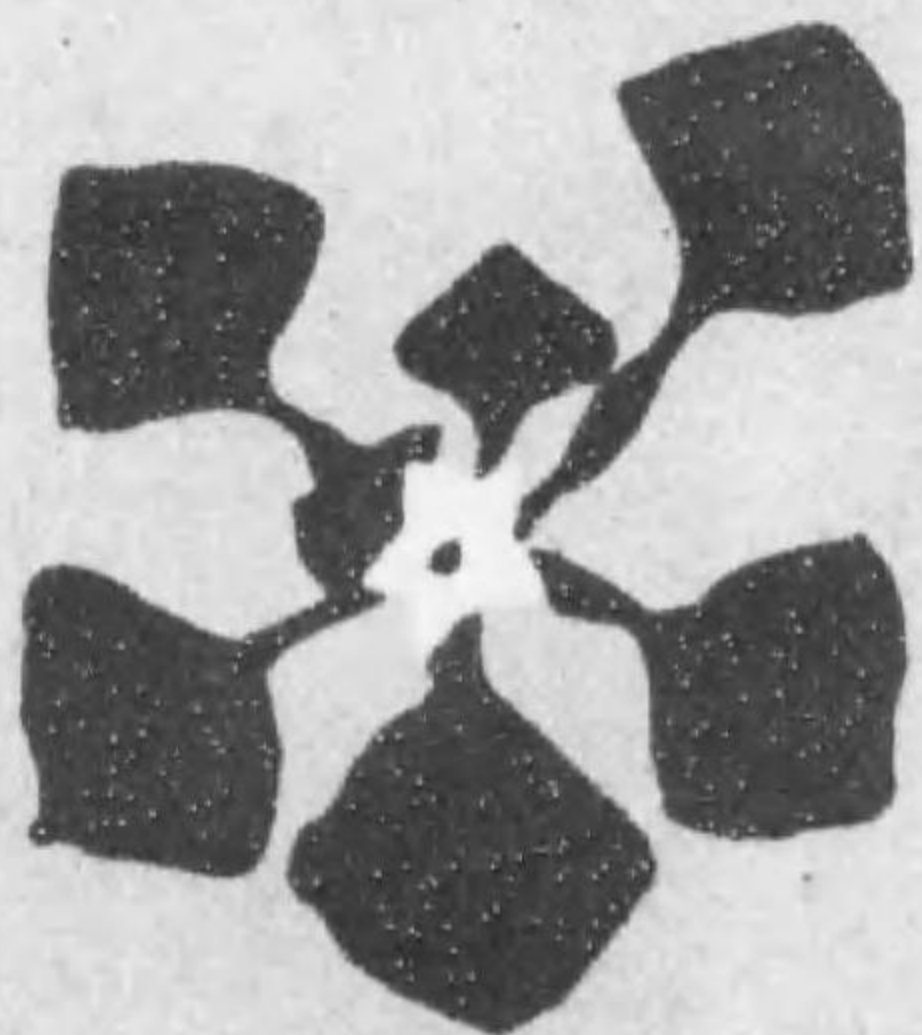
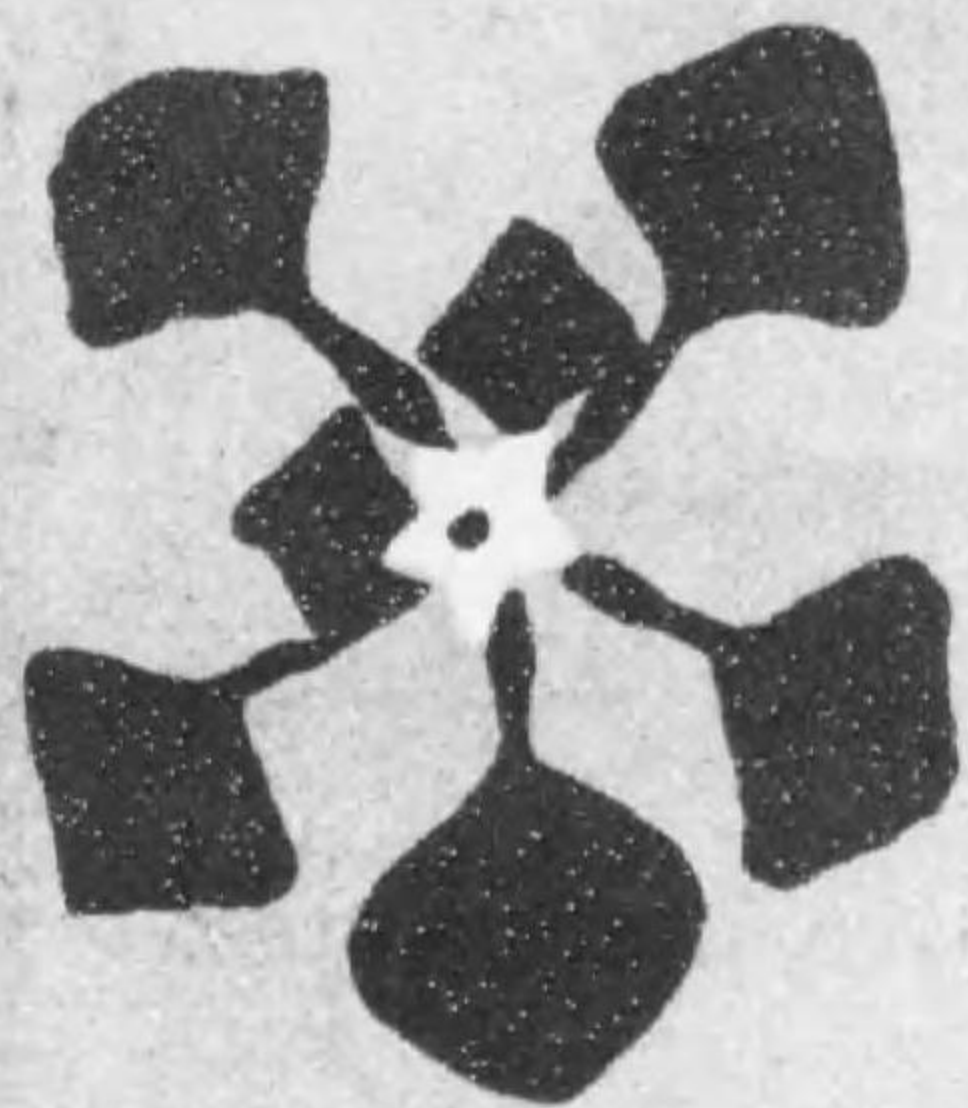
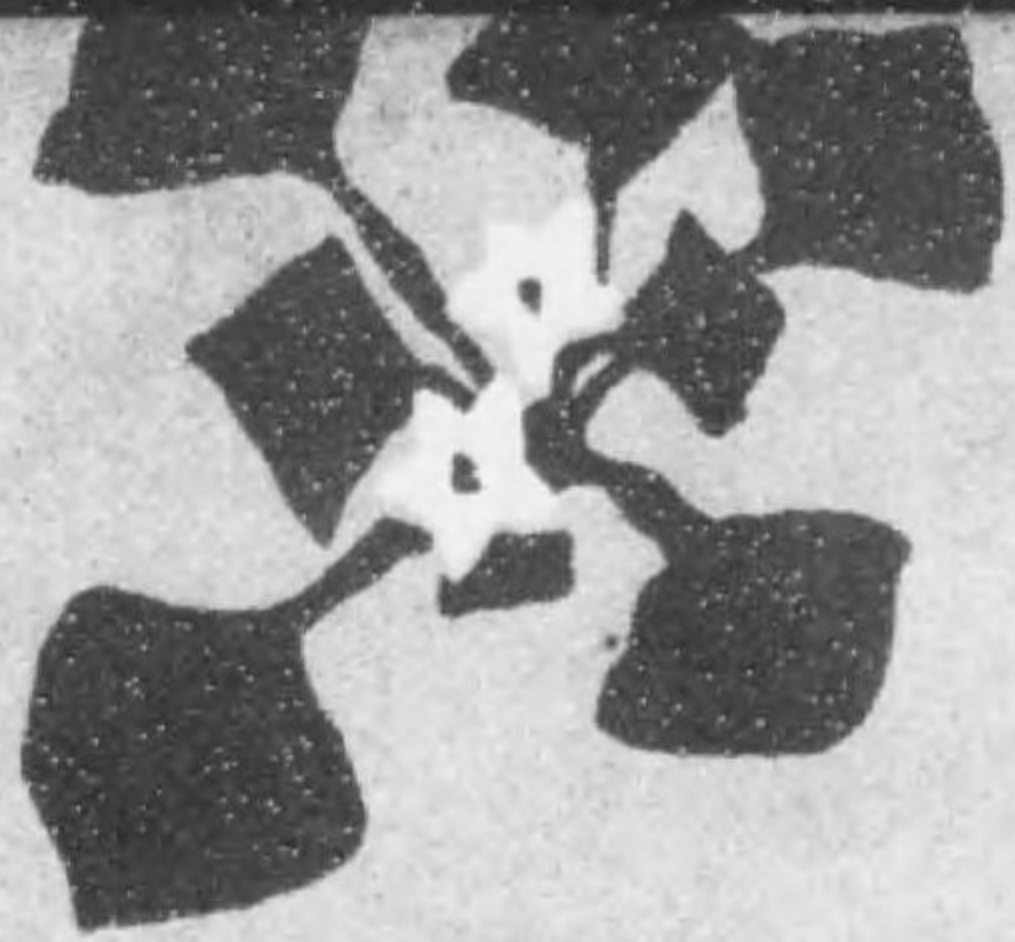
東京市日本橋區鐵砲町六番地

著十民天崎松

青戀同萬女人淪甲東新	い酒と赤い戀	と名と金と	棲十年三年	八年筆	生探訪	落の女	州見開記	京の女	新聞記者修行
絶版	四版	四版	三版	再版	四版	七版	再版	三版	絶版
正價 金九拾錢	正價 金九拾錢	正價 金八拾五錢	正價 金七拾錢	正價 金壹圓	正價 金六拾五錢	正價 金五拾錢	正價 金四十錢	正價 金四拾錢	

高島平三郎先生著	ウミヲガネ著	茅原華山先生著	鵜崎鷺城先生著	南蠻鐵佐野實先生著	高橋淡水先生著	土屋節堂先生著	秋保安治先生共著	高橋立吉先生著	同	本田農學博士著
修養二十講	安心立命論	孤獨の悲哀	筆	南洋諸島巡行記	乃木將軍言行錄	悲壯史談 武田 出落	發明及發明家	發明及發明家	發明及發明家	養鷄學講義
中判總布製 四百頁函入	中判總布製 四百七十餘頁	中判總布製 四百七十餘頁	中判洋裝 三百六十餘頁	菊判總布製 五百五十餘頁	菊判洋裝 全一冊	中判洋裝 全一冊	中判總布製 全一冊	中判總布製 全一冊	中判總布製 全一冊	菊判洋裝 全一冊
正價 金壹圓貳拾錢	正價 金八拾	正價 金八拾	正價 金六拾	正價 金貳拾	正價 金六拾	正價 金六拾	正價 金八拾	正價 金八拾	正價 金八拾	正價 金參拾五錢

210
579



終

